ラテン語宗教曲、単語の意味と日本語訳

伊 藤　啓

ラテン語宗教曲、単語の意味と日本語訳

目次

はじめに	1
第１章　ミサ	2
第2章　レクイエム	11
第3章　よく用いられる祈り	24
第４章　マーラー　交響曲第８番	26
第5章　ミサの発音	37
第6章　ミサの解説	42
第7章　レクイエムの解説	49
第8章　マタイ受難曲	54

PDF化にあたって

本ファイルは、著者が1990～1991年に作成した文章をPDFファイル化したものです。著作権は留保しますが、印刷、頒布、コピー、転送等にはいっさい制限を設けません。ご自由にお使い下さい。授業、講義、サークル等での大量コピーも構いません。ただしいずれの場合も、著作権者が必ず表示されるようにお願いいたします。また、内容の改変はお断わりいたします。

その他お問い合わせ、また内容に関して訂正すべき点などがありましたら、著者までお知らせ下さい。

2003年11月

伊藤　啓

東京大学 分子細胞生物学研究所 高次構造研究分野

〒113-0032 東京都文京区弥生 1-1-1

電　　話：03-5841-2267 (もしくは5841-2435)

ファックス：03-5841-7837

電子メール：itokei@iam.u-tokyo.ac.jp

はじめに

古来多くの作曲家によって、ミサ曲、レクイエム、など数々の宗教曲が作られ、人々に親しまれている。しかしこれらは元来単独の曲として演奏されるために作られたのではなく、ミサという礼拝儀式の中で歌われるために作られた、祈りのための曲である。これらの曲を理解するためには、それが演奏された場であるミサについて知るとともに、その歌詞についてもよく理解する必要があろう。

宗教曲を収めたほとんどの楽譜、ＣＤには、対訳が付されている。しかし多くの作曲家は、個々の単語の意味を考えながら歌詞に旋律を付ける音画的描写を行なっているので、対訳でなく歌詞の中の個々の単語の意味を知ることは、曲の演奏、鑑賞に大きな意味を持つ。ところがこの歌詞は日本人にはなじみの薄いラテン語で書かれている。ラテン語は語尾活用がきわめて多種類にわたる複雑な文法を持っているので、歌詞に出てくる単語がその形でラテン語辞書に載っていることはほとんどない。

そこで、多くの作曲家が共通の歌詞で作曲しているミサ曲、レクイエム(死者のためのミサ)、及び、主の祈り、アヴェ・マリア、アヴェ・ヴェルム・コルプス、の３つの祈りの文句について、若干の解説を作ってみた。まず、各単語の意味を文中で用いられている活用形に合わせて示し、なるべく直訳に近い対訳を施した。キリスト教の背景を知ると歌詞の理解が容易になると思われる部分には、注を加え、参照すべき聖書の箇所を示した。また各曲の歌詞の前に、歌詞の成り立ちについて簡単に述べた。

演奏者、鑑賞者の便宜を図るため浅学非才を顧みずにまとめたこの小文が、少しでもお役にたてば幸いである。なお、理解の浅い点、誤っている点などを見つけられたならば、ぜひ筆者までお知らせいた だけると有り難い。

1991.10月　伊藤　啓

訳にあたっての注

※　単語の意味は文脈に合わせて選んでいるので、同じ単語でも場所によって違う訳が当ててあることがある。単数複数、時制、格は、なるべく語尾変化に合わせた。

※　ラテン語は主語をよく省略し、動詞の語尾変化で主語を示すので、必要に応じて(　)内に補った。動詞の語尾は「○○せよ」は命令法のもの、「○○しますように」は願望・命令を示す接続法(英語の仮定法)のものを示す。従属節中の接続法や不定法、分詞は、直説法(原形)と区別して訳せなかった部分もある。

※　「である」とあるのは全て英語のbe動詞にあたるsumの活用形である。完了形を作る補助動詞として用いられている場合などは、本動詞とまとめて訳した。

※　二人称を示すtuは、神→「汝」、キリスト→「あなた」、死者本人→「君」と区別した。

※　関係代名詞qui(英語のthatにあたる)は、～のもの、～の人、などと訳したが、本来日本語にはない品詞なので、対訳の方に該当する言葉がない場合もある。

※　ラテン語では「ＡとＢが○○する。」と言うとき、「Ａが○○する、そしてＢも。」と言うように表現する。意味をつかむ際、参考にされたい。

参考文献

聖書　(日本聖書教会)
カトリック大辞典 (上智大学編、冨山房)
新聖書大辞典　(キリスト新聞社編)
ポケット聖書辞典 (いのちのことば社編)
ミサ －その意味と歴史－ (土屋吉正、あかし書房)
ラテン語入門　(呉　茂一、岩波全書)
羅和辞典　(田中秀央、研究社)
音楽大事典　(平凡社編)

第１章　ミサ

ミサとは、カトリック・キリスト教の礼拝のことである。キリストがユダヤ人によって死刑にするために捕らえられる直前、キリストは弟子たちと最後の晩餐を行なった。そこでキリストは、パンとぶどう酒を皆に与えて、「これは世の罪を負って十字架につけられ、神にあがないをするための私の血と肉である。これを飲み、食べることで、私を記念するように」と述べた。この最後の晩餐を再現し、神への信仰を確認するのがミサである。

元来ユダヤ教では、安息日である土曜日に集まって、聖書(旧約聖書)を読む習慣があった。初期キリスト教ではこれに加えて、キリストが復活した日である日曜日にも集まって、皆でともに食事をすることで信者の団結を確認していた。やがてこの二つの集会はまとめられ、日曜日に集まってともに聖書を読み、食事をするようになった。食事はやがて簡略化され、象徴としてパンを分けあって食べるのみになった。これが現在のミサの起こりである。従ってミサは、前半の聖書を読む部分(ことばの典礼)と、後半のパンを分けあう部分(交わりの儀)の、二つの主要部分からなる。

ミサは聖職者によって毎日８回づつ行なわれることになっているが、信者が参加するのは通常週１回、日曜日である。毎日曜(主なる神の日ということで、「主日」という)は、「〇〇聖人の記念日」、復活祭(イエスの復活した日)、聖霊降臨祭(マリアが聖霊によって妊娠した日)、イエスの誕生日、というように、その日によってミサの目的が決まっている。また、死者を弔うための「死者のためのミサ」も、随時開かれる。

プロテスタント教会と異なりカトリック教会では、礼拝で唱えられるほとんどの言葉が、司祭と会衆(ミサに参加する一般信者)の対話(かけあい)も含めて、台本のような形で決められている。毎回のミサで朗読される聖書の箇所や、司祭による説教の内容なども、ローマ教皇庁(バチカン)の指示によって全教会を通じて一律に決められている。

新訳聖書は、当時の地中海世界の公用語であったコイネー・ギリシャ語で書かれており、初期の礼拝もギリシャ語で行なわれていた。しかしキリスト教がローマ帝国に広まるにつれ、聖書もラテン語に翻訳され、礼拝にもラテン語が用いられるようになった。ミサの形式の骨格はすでに2、3世紀には定まり、7世紀までには主要部分の式次第が整った。その後時代を経るに従って、様々な礼拝の文句が新たに導入されたり、一部が変更されたり、また廃止されたりした。

16世紀半ばのトレントの公会議(宗教上の重要問題を討議する会議)において、カトリック教会は、当時場所によって違いの生じていたミサの式次第を統一し、各教会での独自の変更をいっさい許さないことを決定した。各地で盛んになりつつあったプロテスタント運動に対抗するためである。この結果1570年にローマ典礼書が発布された。この典礼書に従うミサを、(変更を禁ずるため)朱文字で書かれたミサという意味で、ルブリカミサ(朱文字ミサ)という。ラテン語で行なわれるミサの言葉を各国語に訳すことは、翻訳の過程でプロテスタント的な考えが混入することを防ぐために禁止された。これには、アジア、アメリカ等へのキリスト教伝道の急速な展開に合わせ、信者が全世界どこに行っても、まったく同じ内容のミサに参加できるという意義もあった。

時代の変化に合わせてミサの変更が行なわれたのは比較的最近で、1962～65年の第２バチカン公会議 aにおいてである。これによってラテン語以外の各国語でのミサが許されるようになった。現在日本では、ラテン語によるミサはほとんど行なわれていない。

現在演奏されるほとんどのミサ曲は、トレント、バチカンの2つの公会議の間の、400年間のルブリカミサの時代に作られたものである。従って作曲者を問わず、歌詞はすべて共通で、ラテン語で書かれて いる。

ミサで唱えられる文句は二つに分けられ、

毎回共通の部分	：	通常文
ミサの行なわれる日によって異なる部分	：	固有文

と呼ばれている。ミサの言葉は古くから「歌うように唱える」ものとされ、通常文、固有文それぞれについて、単旋律(ユニゾン)の歌が作られた。これがグレゴリオ聖歌である。これに加えて、12世紀頃からは複旋律(合唱)の歌も

作られるようになった。

毎回のミサで唱えられる通常文のうち、会衆が唱える以下の５つ、すなわち

キリエ	：	憐れみの賛歌
グローリア	：	栄光の賛歌
クレド	：	信仰宣言
サンクトゥス／ベネディクトゥス	：	感謝の賛歌
アニュス・デイ	：	平和の賛歌

は、ミサの中でも特に重要な位置を占めるので、この５ケ所を選んで複旋律の音楽が作曲されるようになった。これがいわゆる「ミサ曲」で、14世紀末、現在のベルギーを中心とするフランドル楽派に属するギョーム・ド・マショーらの頃が最初とされている。以来今日まで、ルネサンス、バロック、古典、ロマン、、、と音楽の流れの変わるにつれて、そのときどきの形式で、まったく違った雰囲気のミサ曲が、作られ続けてきた。長いものも短いものもあるが、短い曲では２つの言葉を違うパートが同時に歌うなどして時間を節約し、長い曲では同じ言葉を何度も繰り返して時間を稼いでいる。

これらのミサ曲を使って実際にミサを行なう場合、作曲されているのは通常文の中の５ケ所だけであるから、ほかの通常文や、固有文の部分には、グレゴリオ聖歌や、その他特定の歌詞にあわせて作られた宗教曲が用いられた。また一部の大きな教会では、聖書朗読の前などに器楽曲が演奏されたこともある。いずれにせよ、ミサ曲として作曲された音楽だけでミサが行なわれることはない。

ミサの中でも、高位の聖職者が司式し、侍者や聖歌隊を多く従えたものを、「ミサ・ソレムニス」(盛儀ミサ、荘厳ミサ)という(ベートーベンの作品だけが荘厳ミサではない)。また、全体をコンパクト に作曲し、規模も小さくしたミサ曲を「ミサ・ブレヴィス」(短ミサ)という(パレストリーナ、モーツ ァルトなど)。ルター派の教会で歌われた、キリエとグローリアだけの曲を、「ミサ・ブレヴィス」ということもある(バッハなど)。

プロテスタント教会では、カトリックのように厳密に決まった礼拝の台本がないので、ミサ曲を用いる習慣はない。上に書いたように、ルター派ではキリエとグローリアだけのミサ・ブレヴィスがしばしば作曲された。またグレゴリオ聖歌のかわりに、ドイツ土俗の曲から作られた賛美歌(コラール)が歌われた。その日のミサの内容に合わせて、聖書の引用や自由に作られた詩を組み合わせて作曲された「カンタータ」も、ミサ曲の代わりをつとめた。同様に英国国教会では、「アンセム」という英語版カンタータが礼拝に用いられた。

カトリックでもプロテスタントでも、一時は音楽的美しさを追求するあまり、本来会衆が全員で唱えるべき言葉のほとんどの部分を訓練された聖歌隊が歌い、会衆はただ聴いているだけという状態に近くなってしまった。これではミサが会衆から遊離してしまうという反省から、近年は聖歌隊のみに頼らず、平易な音楽を用いてなるべく会衆全員で歌う(唱える)ことがふつうになった。そのためもあって現在では、オーケストラと合唱を備えたミサ曲を使ってミサを行なう機会はほとんどない。

以下には、1962～65の第２回バチカン公会議より前の、ルブルカミサ時代のミサの内容を、順を追ってまとめた。その流れの中で、ミサ曲として作曲される各部分について、ラテン語の全文と各単語の訳、全体の対訳を記した。訳は現在礼拝で用いられている言葉を基本にしたが、逐語訳に近づけるために一部変更を加えたので、注意されたい。

【開祭の儀】

ミサの開始を告げる部分。

まず司祭や侍者の入場にともなって、会衆が入祭唱(Introitus:固有文)を唱える。ついで司祭と会衆のかけあいで入祭の挨拶(Salutatio・通常文)が行なわれたのち、みなで改心の祈り(Confiteor:通常文)を唱える。改心の祈りに続いて、会衆があわれみの賛歌(Kyrie・通常文)と、栄光の賛歌(Gloria・通常文)を唱える。

最後に司祭が集会祈願(Collecta:固有文)を行ない、その日のミサの目的を唱える。

Kyrie(主よ)　　**あわれみの賛歌**

三位一体を象徴して、神と、キリストと、聖霊に、それぞれ3回づつ憐れみを乞う。東方教会(現在のUギリシャ正教)の祈りが転用されたので、この部分のみラテン語でなくギリシャ語である。

Kyrie, eleison.　　主よ、あわれんで下さい。
主よ,　憐れめ.
Christe,　eleison.　　キリストよ、あわれんで下さい。
キリストよ, 憐れめ.
Kyrie, eleison.　　主よ、あわれんで下さい。
主よ,　憐れめ.

Gloria(栄光)　　**栄光の賛歌**

キリエ(あわれみの賛歌)に続けて、会衆によって唱えられる。4世紀にはすでに原形があり、6世紀始めから広く用いられている。クリスマス、復活祭の前と、死者のためのミサでは、省略される。

前半は神への賛美と感謝からなり、後半より古く成立したといわれる。後半はキリストへの呼びかけで、賛美をし、憐れみを乞う。最後の一節で、聖霊にも言及する。

最初の一行は先唱者がグレゴリア聖歌の旋律を用いて一人で唱え、会衆は二行目から唱和する習慣だったので、古い曲には一行目を欠き、二行目から作曲されているものも多い。

Gloria in　excelsis Deo,　　いと高きところには
栄光　～に 高い所　神に,　　神に栄光、
et　in　terra pax　hominibus bonae voluntatis.　　そして地には善意の人々に平和。
そして ～に 地　平和 人々に　よい　意思の.

※キリスト誕生の時に羊飼いの前で天使が神を賛美して言った言葉。(新約:ルカ2章14節)

Laudamus　te,　benedicimus　te,　　私たちは汝をほめ、
(私たちは)ほめる　汝を, (私たちは)祝福する 汝を,　　汝を讃え、
adoramus　te,　glorificamus　te.　　汝を拝み、
(私たちは)崇拝する 汝を, (私たちは)あがめる 汝を.　　汝をあがめ、
Gratias agimus　tibi propter　magnam gloriam tuam.　汝の大いなる栄光のゆえに
感謝を　(私たちは)実行する 汝に ～のために 大きな 栄光　汝の.　汝に感謝し奉る。

Domine Deus, Rex　coelestis, Deus Pater omnipotens.　　神なる主、天の王、
主よ　神よ, 王よ 天の,　神よ 父よ　全能の.　　全能の父なる神よ。
Domine Fili unigenite, Jesu　Christe,　altissime.　　主なる御ひとり子、
主よ　子よ 唯一の,　イエス キリストよ, とても高い.　　至高のイエス・キリストよ。
Domine Deus, Agnus　Dei,　Filius Patris.　　神なる主、神の子羊、
主よ　神よ, 子羊よ 神の, 子よ　父の.　　父のみ子よ。

Qui　tollis　peccata mundi,　miserere nobis.　　世の罪を除きたもう主よ、

～の人よ 取り除く 罪を　　世界の，憐れめ　私たちを.　　私たちをあわれんで下さい。
Qui　　tollis　peccata mundi,　　世の罪を除きたもう主よ、
～の人よ 取り除く 罪を　　世界の，
suscipe deprecationem nostram.　　私たちの願いを
報いよ　哀願に　　私たちの.　　聞き入れて下さい。
Qui　　sedes ad　dexteram Patris, miserere nobis.　　父の右に座したもう主よ、
～の人よ 座る　～に 右　　父の，　憐れめ　私たちを.　　私たちをあわれんで下さい。

※キリストは復活の後、再び天にのぼり、それ以来神の右側に座っている。(新約:マタイ26章64節、マルコ16章19節、ルカ22章69節、使途行伝1章3～9節、7章55～56節)

Quonium　tu　　solus　Sanctus, tu　　solus　Dominus,　　あなたのみが神聖で、
～だから あなたが 唯一の 神聖な，　あなたが 唯一の 主，　　あなたのみが王で、
tu　　solus　Altissimus, Jesu　Christe.　　あなたのみがいと高いのだから、
あなたが 唯一の とても高い，イエス キリストよ.　　イエス・キリストよ。

Cum　　Sancto spiritu in　　gloria Dei　Patris.　　聖霊とともに、
～とともに 聖なる 霊　　～の中に 栄光　神の 父の.　　父なる神の栄光のうちに、

Amen.　　そうでありますように。
まことにまことに.

【ことばの典礼】

聖書を朗読して、キリストの行跡と教えを思いかえす部分。

現在は古いミサの形式を復元して、最初に朗読者によってキリストの行ないに関連する旧約聖書朗読が行なわれ、ついでそれに対応する内容の歌を、旧約聖書の聖歌集である詩篇から選んで会衆が唱える(答唱詩篇)。ついで新約聖書後半にある、キリストの弟子が各地の教会に宛てた手紙の一節が、朗読者によって読まれる(書簡朗読)。

ミサ曲の作曲されたルブリカミサ時代には旧約聖書朗読は行なわれておらず、最初に書簡朗読 (Lectio libri　apostoli: 固有文)が行なわれ(時によってかわりに旧約聖書が読まれることもあったらしい)、次に会衆によって昇階唱(Graduale・固有文)が唱えられた。ついで会衆によって、次に読まれる福音書を歓迎して、歓喜の歌であるアレルヤ唱(Alleluia・固有文)が唱えられる。キリストの処刑記念日の前後や死者のためのミサの際は、歓喜の歌のかわりに悲しみの歌である詠唱(Tractus・固有文)が唱えられる。死者のためのミサなど一部のミサでは、アレルヤまたは詠唱に続いて、続唱(Sequentia・固有文)が唱えられる。

司祭と会衆のかけあいで挨拶(Salutatio・通常文)を歌いかわし、福音書への心構えを新たにしたのち、いよいよ助祭 (ミサのなかで司祭の補助をする聖職者) によって福音書の朗読 (Lectio evangelii・固有文) が行なわれ、新約聖書前半にある、キリストの伝記の一節が読まれる。朗読箇所は、１年間でキリストの行跡を一巡するように選ばれる。朗読の最後に、会衆がキリストを賛美する文句を唱える。

朗読に続いて、司祭によって説教(Homilia・固有文)が行なわれ、朗読内容にちなんだ教えの解説が行なわれる。

書簡朗読、福音書朗読、説教によってキリストの教えを復習した会衆は、信仰宣言(Credo・通常文)を唱え、信仰を持ち続けていることを神の前に明らかにする。

最後に、司祭と会衆一同は共同祈願 (Oratio　communis) を行ない、集まった信者や地域の共同体、教会全体などに関わるさまざまな祈願をする。

Credo(信じる)　　**信仰宣言**

【ことばの典礼】において、聖書朗読のあと、司祭による説教に続いて唱えられる。4世紀のニケア公会議で、当時出現し始めていた異端思想に対して正統キリスト教の信ずべき内容を明らかにするために「原ニケア信条」が作られ、これにパレスチナ教会で用いられていた祈りの文句が融合して、現在の形が定まった。長い間、4世紀末のコンスターチノープル公会議で原ニケア信条を補筆して今の形になったと考えられていたので、「ニケア・コンスタンチノープル信条」、また省略して「ニケア信条」とも呼ばれる。ニケア信条は主として東方教会で用いられ、ローマ教会ではほぼ同内容の「使徒信条」が用いられていた。東方教会の信条はやがてゲルマン地域の教会に広まり、11世紀になって初めてローマ教皇のミサにも取り入れられた。

まず神への信仰が確認される。ついで神の子であるキリストへの信仰を確認し、キリストが地上に下って人になったこと(受肉)、十字架につけられたこと(受難)、三日目によみがえったこと(復活)が確認される。三番目に、神の現われである聖霊への信仰を確認し、教会と洗礼の意義の承認、死後の復活の待望を表明する。

死者のためのミサでは省略される。またグローリア同様、最初の一行は先唱者が唱え、会衆は二行目から唱えるので、しばしば二行目から作曲される。

Credo　　in　unum　Deum,	私は信じる、唯一の神を、
(私は)信ずる　～を　唯一の　神を,	
Patrem omnipotentem,	全能の父を、
父を　全能の,	
factorem coeli et terrae, visibilium omnium et invisibilium.	天と地、見える物、見えない
造る人を　天を　と　地を,　見える物を　全ての　と　見えない物を.	物すべての造り主を。
Et　in　unum　Dominum,	そして(私は信じる)、
そして　～を　唯一の　主を,	唯一の主を、
Jesum　Christum,　Filium Dei　unigenitum,	イエス・キリストを、
イエス　キリストを, 子を　神の　唯一の,	神の御ひとり子を、
et　ex　Patre natum　ante　omnia　saecula.	そして、よろず世より先に
そして　～から　父　誕生を　～の前に　全ての　世代.	父より生まれたことを。
Deum de　Deo,　lumen de　lumine,	神よりの神を、
神を　～よりの　神,　光を　～よりの　光,	光よりの光を、
Deum verum　de　Deo vero,	まことの神よりの
神を　真実の　～よりの　神　真実の,	まことの神を、
genitum, non　factum,	造られたのでなく、
誕生を,　でない　造られたということを,	生まれたのだということを、
consubstantialem Patri, per　quem　omnia　facta sunt.	全てを造った父と
同体であることを　父に,　～によって　～の人　全てが　造られた.	一体であることを。

※神はすべてのものを造った(新約:ヨハネ1章3節)。人の祖先であるアダムも、神によって土から造られた。しかしキリストのみは神に造られたのではなく、人間を介して神が生ませた神の息子である。4世紀に起こったアリウス派異端は、キリストはあくまで人であって神ではないと説いた。しかしニケア公会議においてこの考えは否定され、父なる神と子なるキリストは同質のものであることが決議された。

Qui propter nos homines et propter nostram salutem 主は私たち人類のため、
その人 〜のために 私たち 人間 と 〜のために 我たちの 救済 また私たちの救いのために
descendit de coelis. 天よりくだった、
降りた 〜から 天.
Et incarnatus est de Spiritu Sancto そして聖霊によりて、
そして 肉体化された 〜によって 霊 聖なる
ex Maria Virgine, 処女マリアからみ体を受け、
〜から マリア 処女の,
et homo factus est. 人になられた。
そして 人が 造られた.

※マリアへの聖霊降臨は新約:ルカ1章26〜38節、キリストの誕生は2章1〜7節に詳しい。

Crucifixus etiam pro nobis ポンシオ・ピラトのもとで
十字架につけられた さらに 〜のために 私たち
sub Pontio Pilato, さらに私たちのために
の下で ポンチオ ピラト, 十字架につけられ、
passus et sepultus est. 苦しみを受け、
苦しまされた そして 埋葬された. 葬られた。

※ピラトはローマ占領下のイェルサレムの総督で、ユダヤ教指導者に告発されたキリストを死刑に処した。(新約:マタイ27章、マルコ15章、ルカ23章、ヨハネ18章28節〜19章)
キリストの受難は、人の罪を一身に引き受けてあがなうためであり、キリストの死によって世の罪は除かれた。このことは旧約聖書でも預言されている。(旧約:イザヤ53章、ほか)

Et resurrexit tertia die, secundum Scripturas. そして聖書に従って
そして 復活した 第三の 日に, に従って 書物(聖書). 三日目によみがえり、

※キリストは何度も、自分が死んで三日目(＝翌々日)によみがえると予言し(新約:マタイ12章40節、16章21節、17章23節、20章19節、ほか)、その通り復活した(マタイ28章、マルコ16章、ルカ24章、ヨハネ20章)と新約聖書にある。
復活の意義については、新約:コリント人への第一の手紙15章に詳しい。15章4節でパウロは、キリストが「聖書に書いてあるとおり」よみがえったと述べている。この手紙の書かれたときはまだ新約聖書は出来ていなかったので、これは当然旧約聖書を指すはずだが、救い主の復活を明示する預言は旧約聖書にはない。詩篇16篇10節やホセア書6章2節を組み合わせると、復活が示唆されていると考えることが出来なくもない(使徒行伝2章25〜36節)。

Et ascendit in coelum, sedet ad dexteram Dei Patris, 天にのぼって、父なる
そして 上った 〜に 天, 座る 〜に 右 神の 父の, 神の右に座られている。

※キリストは復活の後、40日の間地上に留まり、弟子たちに布教に励むよう伝えて、再び天にのぼった。キリストはそれ以来、神の右側に座っている。(新約:マタイ26章64節、マルコ16章19節、ルカ22章69節、使途行伝1章3〜9節、7章55〜56節)

et iterum venturus est cum gloria, そして栄光のうちに再び
そして 再び 来ようとする 〜とともに 栄光,
judicare vivos et mortuos, 生ける人々と死せる人々を
裁きに 生けるものたちを と 死んだものたちを, 裁きに来るであろう。
cujus regni non erit finis. 主の国の終わることは

その人の 国の　ない であるだろう 終末.　　ないであろう。

※キリストは世の終わりの最後の審判の際、天の雲に乗って再び地上に下るとされている。
(旧約:ダニエル7章13節、新約:マタイ24章30節、ルカ21章27節、ほか)

Et　in　Spiritum Sanctum, Dominum et　vivificantem,　そして(私は信じる)、聖なる、
そして ～を 霊を　聖なる,　主を　そして 生命を与える.　主なる、生命を与える霊を。
qui　ex　Patre　Filoque　procedit.　それは父と子より出る。
その物は ～から 父から ～と子から 現われる.
Qui　cum　Patre et Filio simul　父と子とともに
その物は ～とともに 父　と 子　同時に
adoratur　et　conglorificatur:　拝まれ、あがめられる。
礼拝される そして 讃えられる:
qui　locutus est per　Prophetas　それはまた預言者によって
その物は 話された　によって 預言者.　語られた。

※聖霊は神から人間への働きかけのようなもので、神の息とも表現される。物質である人間に生命を与えたり(旧約:創世記2章7節)、預言者に預言をさせたり(旧約:イザヤ61章1節)するほか、色々な働きが預言書に記されている。
キリストは聖霊によってマリアに宿り(新約:マタイ1章18節)、聖霊に導かれて布教を始めた(旧約:イザヤ42章1節、61章1～2節、新約:ルカ4章1節、4章18節、ほか)。キリストが天にのぼった後は聖霊が使徒を導き(使徒行伝2章4節、4章31節、16章6節、ほか)、洗礼を受けた信者に恵みを与える(新約:使徒行伝2章38節、10章45節、ほか)。

※キリストが天に上るまでは、聖霊は父である神のみから発した。しかし天に上ったキリストは、父とともに聖霊を発し、信者を導いていると考えられている。

※キリストは父と子と聖霊を並立して述べている(マタイ28章19節)。この三つは、神という一つの存在の三側面であるとして、ともにあがめられている(「三位一体」の原理)。

Et　unam,　sanctam, catholicam　そして(私は信じる)、ひとつの、
そして 唯一の, 聖なる,　公の　聖なる、公の、
et　apostolicam Ecclesiam.　また使徒の教会を。
また 使徒の　教会を.

※公とは、教会が普遍的な存在であることを、使徒とは教会が十二使徒が最初に布教を始めたときから連綿と続いている(使徒継承)ことを示す。

Confiteor　unum　baptisma in　remissionem peccatorum. 私は承認する、罪のゆるしの
(私は)承認する 唯一の 洗礼を　～において 赦免　罪の.　ための唯一の洗礼を。

※洗礼(バプテスマ)はキリスト教への信仰を表明する儀式である。洗礼を受けた人は、世の罪を除くために犠牲になったイエス･キリストにあずかることで、罪の許しを得る(新約:ローマ人への手紙6～8章、使徒行伝2章38節、ほか)。
キリスト自身が直接洗礼を授けたことはなかったが、弟子には聖霊によって洗礼が授けられ(使徒行伝1章5節、2章4節)、彼らはキリストの指示に従って人々に洗礼を施した(マタイ28章19節、使徒行伝2章41節、8章14～24節、10章47節、19章2～7節、ほか)。
なお同じ目的で、キリストより前に「バプテスマのヨハネ」が人々に洗礼を授けているが、(新約:マルコ1章4～9節)キリストの洗礼は聖霊の恵みを伴う点で、ヨハネのものとは比較

ならない価値を持つとされている。

Et exspecto resurrectionem mortuorum,	そして待ち望む、
そして (私は)待ち望む 復活を 死者の,	死者の復活と
et vitam ventri saeculi.	来世の生命を。
また 生命を 将来の 世代.	
Amen.	そうでありますように。
まことにまことに.	

【感謝の典礼】

最後の晩餐でキリストによって配られたパンを記念する「聖体」の準備を行なう部分。

まず会衆によって奉納唱(Offertorium・固有文)が唱えられ、パンとぶどう酒が祭壇に捧げられる。教会への献金も同時に行なわれる。ついで司祭によって密誦(Secreta・固有文)が唱えられる。これは奉納を祈願する祈りで、従来は黙読された。

司祭と会衆が挨拶(Salutatio・通常文)を歌い交わしたのち、司祭は叙誦(Praefatio･固有文)を唱え、神と信者の前で、神の救いの業を述べる。

会衆はこれに応えて、神の神聖さに感動する歌である感謝の賛歌(Sanctus・通常文)を歌う。会衆がこの歌を歌っているあいだに、司祭はミサ典文 (聖別祈祷､奉納文:Canon missae・通常文) を黙読する。これは最後の晩餐でのキリストの言葉を元にした祈りで、この祈りによって、捧げられたパンとぶどう酒が「聖体」に変化する(聖変化)。

司祭の黙読が終わるころ、会衆の歌は感謝の賛歌の後半(Benedictus・通常文)に入り、聖変化を受けて主の名のもとに会衆のところへやってくるパンとぶどう酒を歓迎する。

Sanctus(神聖である)　**聖なるかな**

【感謝の典礼】において、パンとぶどう酒を捧げた後に唱える。神の神聖さに感動する内容である。サンクトゥスを歌う間に、捧げられたパンとぶどう酒が司祭の祈りで聖体に変えられ(聖変化)、ベネディクトゥスで、パンとぶどう酒の形をとってやって来る主キリスト(あるいは、主の名によってやって来るパンとぶどう酒)を歓迎する。サンクトゥスは6世紀、ベネディクトゥスは7世紀から用いられている。多くの場合ベネティクトゥスの方が小篇成で、地味に作曲される。両曲の末尾のホザンナは共通の主題で作曲されることが多い。

Sanctus, Sanctus, Sanctus Dominus Deus Sabaoth.	聖なるかな、聖なるかな、
神聖である, 神聖である, 神聖である 主 神 万軍の.	聖なるかな、万軍の神なる主は。
Pleni sunt coeli et terra gloria tua (ejus).	天と地は汝の(彼の)栄光に
豊富な である 天は そして 地は 栄光 汝の(彼の).	満ちている。

※天使セラフィムが預言者イザヤの前で言った言葉。(旧約:イザヤ書6章3節)

同様の賛美を、世の終わりに現われる「四つの生き物」も述べている(新約:黙示録4章8節))

Hosanna in excelsis.	いと高きところに
万歳(ヘブライ語) ～に 高いところに.	万歳。

Benedictus(祝福された)　**ほむべきかな**

Benedictus, qui venit in nomine Domini.	主の名によりて来たるものは
祝福された, ～のもの 来る ～によって 名前 主の	祝福された。

※キリストがロバに乗ってイェルサレムに入るとき、群衆がシュロの枝を振りながら歓迎して叫んだ言葉。(新約:マタイ21章9節、マルコ11章9節、ルカ19章38節、ヨハネ12章13節。原典となる言葉は、旧約:詩篇118篇26節にある。)
またキリストは、彼を受け入れないイェルサレムの人々に対し、キリストを受け入れる時に発するべき言葉として、この言葉を伝えている。(新約:マタイ23章39節、ルカ13章35節)

Hosanna in excelsis. いと高きところに万歳。
万歳(ヘブライ語) ～に 高いところに.

※マタイの記録では、上の言葉の後にこの言葉がつけられている。(マタイ21章9節)

【交わりの儀】

聖体を拝領する部分。まず会衆は、キリストが直接弟子に教えた祈りである主の祈り(Pater noster・会衆)を唱える。司祭は祈りを補足して、副文(Embolismus・通常文)を唱える。ついで司祭と会衆は平和の挨拶(Pax・通常文)を交わし、互いに前後左右の人と挨拶をする(欧米では握手をし、日本ではお辞儀をする)。

ついで会衆は平和の賛歌 (Agnus Dei・通常文) を唱える。聖体となったパンを「神の小羊」と呼び、人類のためにいけにえとなったキリストに、憐れみを乞う。この間に、司祭は聖体を分ける準備をする。

ついで聖体拝領が行なわれる。会衆は列を作って、司祭から一口づつ聖体(ホスチア)を拝領する。以前は、地域によっては会衆は聖体を拝領せず、司祭のみが信者を代表してひとりで聖体をいただくことも多かった。

聖体拝領を行なう間、あるいは行なった後に、聖体拝領唱(Communio・固有文)が歌われる。最後に司祭によって、拝領を感謝する拝領祈願(Oratio・固有文)が唱えられる。

Agnus Dei(神の小羊) **平和の賛歌**

【交わりの儀】において、聖体拝領の前に唱えられる。キリストの象徴である聖体となったパンを、「バプテスマのヨハネ」がキリストに会ったときに言った言葉にちなんで「神の小羊」と呼び(新約:ヨハネ1章29節)、人類のためにいけにえとなったキリストに永遠の平安を願う。この曲の間に、司祭は聖体を分ける準備をする。7世紀末から使われている詩である。

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi: 世の罪を除きたもう神の子羊よ、
小羊 神の, ～の人 取り除く 罪を 世界の:
miserere nobis. 私たちをあわれんで下さい。
憐れめ 私たちを.
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi: 世の罪を除きたもう神の子羊よ、
小羊 神の, ～の人 取り除く 罪を 世界の:
dona nobis pacem. 私たちに平和を与えて下さい。
与えよ 私たち 平和を.

※キリストは十字架にかかることで世界の人々の罪をあがない、取り除いた。
※死者のためのミサでは、最後の一節はdona eis requiemに変化する。

【閉祭の儀】

司祭によって閉祭の挨拶(Ite Missa Est・通常文)が述べられる。Ite Missa Estは「行け、これにて去れ」という意味で、この言葉から「ミサ」という名前が出ている。ただ単にミサが終わったから帰るというのではなく、教会から外へ信者を派遣することによって教えを広めていく、というニュアンスが込められている。

第2章　レクイエム

レクイエムはミサの一種で、「死者のためのミサ」の別名である。この種類のミサは10世紀末に現われたもので、毎年11月２日の「死者の日」のほか、葬式や慰霊祭の折に行なわれる。レクイエム(「平安を」)と呼ばれるのは、死者のためのミサがこの言葉で始まり、また式のあいだ頻繁に唱えられる言葉だからである(「平安」という単語はrequiesであるが、目的格のときは語尾が変わってrequiemになる)。なお、ミサはカトリック教会の礼拝儀式だから、当然のことながらプロテスタント教会では礼拝としてレクイエム・ミサを行なうことはない。従ってプロテスタントの作曲家は、一部の例外をのぞきレクイエムを作曲していない。

キリスト教では、死んだ人間は実はただ眠っているだけであり、世界の最後の日にラッパによって呼び起こされ、復活するとされている。ただし、復活した人間はそのまま永遠の生命を得られるわけではなく、復活の後に「最後の審判」を受けなくてはならない。それぞれの人について、生前の行ないをすべて記録した「生命の書」というのが作られており、ラッパの音とともに地上に下ってきた神が、これをもとに審判を下す。そして選ばれた人だけが永遠の生命を得ることができ、審判に落ちた人は救済のない本当の死である「第二の死」を迎えることになる。

死者のためのミサは、仏教の葬式などとは異なり、特定個人のための礼拝ではない。ミサの中でたびたび繰り返される"Dona eis requiem."という言葉は、「彼ら(eis)に平安を与えたまえ」という意味であって、「彼(ei)に平安を与えたまえ」ではない。死者を示す言葉は原則として複数形で現われ、ともに最後の審判を受ける死者全般を指す(その中には、今ミサに参加している会衆も含まれよう)。

死者のためのミサの中には例外的に、「彼らを(eis)」でなく、また通常のミサ文で用いられる「私たちを(nobis)」でもなく、「私を(me)救いたまえ」と連呼する部分がある。セクエンツィア(続唱、ディエス・イレ)と、ミサ終了後のアブソルーチオ(赦祷唱、リベラ・メ)である。この２つは最後の審判の恐ろしさを強調した内容であるが、対訳中の説明で触れるように、ともに通常のミサとは少々異なる由来を持っている。個人的な祈りが強く表現された箇所といえよう。

死者のためのミサがミサの一種であるのと同様に、音楽としてのレクイエムはミサ曲の一種である。いわゆる「ミサ曲」は、毎回のミサで用いられる通常文のうち特に重要な５ケ所、すなわちキリエ、グロリア、クレド、サンクトゥス／ベネディクトゥス、アニュス・デイに曲をつけたものである。作曲されていない通常文や固有文は、歌わずに唱えたり、グレゴリオ聖歌を用いたりする。一方レクイエムは、用途が死者のためのミサに限られているので、唱える文句は固有文も含めてすべて毎回同じである。従って、レクイエムでは通常文のみでなく、固有文の部分にも曲が作られるのが普通である。

またミサ曲に作曲される通常文のうちグローリアとクレードは、死者のためのミサでは唱えないことになっているので、レクイエムでは作曲されない。

整理すると

レクイエム＝ミサ曲－(グローリアとクレード)＋死者のためのミサ固有文

ということになる。

但し、作曲されるのは会衆が唱える部分だけであって、司祭が唱える部分には作曲されない。また通常文の部分はどの作曲者も必ず作曲しているが、固有文は時代によって、また作曲者によって、一部が作曲されないこともある。作曲者によっては、本来ミサには属さないミサ終了後の儀式(赦祷式、出棺など)のための文句にも作曲することもある。また多くの作曲者は、長い部分をいくつかの曲に分けて作曲したり、異なる部分をつなげて１曲にしたりしているので、ミサの各部分の名称と曲の題名とは 必ずしも一致しない。

以下に、ミサ全体の式次第のうち、レクエイムとして作曲される部分を示す。
■は通常のミサ曲で作曲される部分、●はレクイエムで必ず(一部例外もあるが)作曲される部分、○は作曲者によって作曲されたりされなかったりする部分である。また×は、通常のミサあるいはレクイエムで省略、変更される部分を示す。

【開祭】ミサの始まり

●１： Introitus(入祭唱)　(固有文・会衆)　司祭や侍者の入場にともなう歌。
２： Salutatio(入祭の挨拶)　(通常文・対話)　司祭と会衆が言い交わす。
３： Confiteor(改心の祈り)　(通常文・会衆)　沈黙して各自反省したのち、皆で唱える。
■●４： Kyrie　(あわれみの賛歌)(通常文・会衆)　神とキリストと聖霊に、憐れみを乞う。
■×５： Gloria　(栄光の賛歌)　(通常文・会衆)　死者のためのミサでは省略。
６： Collecta (集会祈願)　(固有文・司祭)　その日のミサの目的を祈る。

【ことばの典礼】聖書の朗読と説教

７： Lectio libri apostoli(書簡の朗読)(固有文・朗読者)　新約聖書後半の、イエスの弟子が各地の教会に宛てた手紙を朗読。
○８： Graduale (昇階唱)　(固有文・会衆)　旧約の内容を思い起こす。詩は通常、旧約聖書の詩編からとられる。
×○９： Tractus　(詠唱)　(固有文・会衆)　福音書朗読を歓迎する歌。通常のミサではハレルヤ唱が用いられる。
×●10： Sequentia(続唱)　(固有文・会衆)　Tractusに続く歌。通常のミサでは省かれる。
11： Salutatio(挨拶)　(通常文・対話)　挨拶を交わし、福音書への心構えを新たにする。
12： Lectio evangelii(福音書の朗読)(固有文・助祭)
新約聖書前半の、イエスの伝記を朗読。
13： Homilia　(説教)　(固有文・司祭)　朗読の内容にちなんで、教えを解説する。
■×14　Credo　(信仰宣言)　(通常文・会衆)　死者のためのミサでは省略。
15： Oratio communis(共同祈願)(固有文・一同)　信者たちのいろいろな祈りを捧げる。

【感謝の典礼】聖体の準備

●16： Offertorium(奉納唱)　(固有文・会衆)　パンとぶどう酒を聖壇に捧げる。
17： Secreta　(密唱)　(固有文・司祭)　奉納を祈願する祈りで、黙読される。
18： Salutatio　(叙唱前の挨拶)(通常文・対話)　挨拶を歌い交わす。
19： Praefatio　(叙唱)　(固有文・司祭)　神と会衆の前で、キリストの救いの業を述べ、記念する。
■●20： Sanctus　(感謝の賛歌)　(通常文・会衆)　神の神聖さに感動する歌。
■●21： Benedictus(感謝の賛歌(続き))(通常文・会衆)　パンとぶどう酒の形をとってやって来る主キリストを歓迎する歌。
22： Canon missae(ミサ典文＝聖別祈祷、奉納文)(通常文・司祭)
パンとぶどう酒を聖体に変える祈り(聖変化)。

【交わりの儀】聖体を拝領

23： Pater noster(主の祈り)　(通常文・会衆)　キリストが弟子に教えた、神への祈り。
24： Embolismus　(副文)　(通常文・司祭)　主の祈りの補足。
25： Pax　(平和の挨拶)(通常文・対話)　平和を祈って前後左右の人と挨拶する。

■●26： Agnus Dei　（平和の賛歌）（通常文・会衆）　聖体となったパンをキリストの象徴として「神の小羊」と呼び、憐れみを乞う。

●27： Communio　（聖体拝領唱）（固有文・会衆）　信者は並んで司祭の前に進み出て、パン(ホスチア)を受ける。その間演奏される。

28： Oratio　（拝領祈願）　（固有文・司祭）　最後の晩餐の秘蹟が日々の生活に活かされるよう祈る。

【閉祭】

29： Ite Missa Est(閉祭の挨拶)(通常文・司祭)　ミサで元気づけられた信者達を教会外の社会へ送り出す。

【ミサ終了後の儀式】

〇30： Absolutio　（赦祷唱＝リベラ・メ）　ミサ参加者の赦免と、死者の平安を祈る。

〇31： In Paradisum（天国にて）　出棺の時、故人が天国に行けるよう願う。

ミサ曲の作曲は、14世紀に今のベルギーを中心とするフランドル楽派で始まった。レクイエムの作曲もそれに続き、現存するものでは15世紀末のオケヘムのものが最古である。16世紀半ばのトレントの公会議でミサの式次第が統一されたが、これ以前の曲には一部歌詞が異なっているものがある。

19世紀に入ると、ミサ曲やレクイエムの作曲された部分だけを、コンサートホールで全曲通して演奏する習慣が定着した。これ以後に作曲されたレクイエムでは、礼拝の形式に従うという制約を逃れたので、歌詞の順序を替えたり、複数の部分を一つの曲として作曲したりすることもある。また、ブラームス、ヒンデミット、ブリテンなどのように、本来のミサの文句とは関係のない独自の歌詞を用いて「レクイエム」を作曲する例もある。

以下には、これらの例外を除いた、ルブリカミサで規定された死者のためのミサの文句について、主要な曲で作曲されている部分すべてについて歌詞とその訳を記した。従って、曲によってはこの内の一a部を欠くものもある。というより、ここに記した歌詞すべてを用いたレクイエムはないといってもよい。<曲に応じて、該当する部分のみを取捨選択して参照されたい。

MISSA PRO　DEFUNCTIS　死者のためのミサ
ミサ　～のための 死者たち

Introitus(入場)　**入祭唱**

固有文。ミサの冒頭の【開祭の儀】において、司祭や侍者の入場にともなって歌われる。死者に永遠の安息が与えられるよう祈る。

Requiem aeternam dona　eis,　Domine:　主よ、彼らに永遠の平安を
平安を　永遠の　与えよ 彼らに, 主よ:　与えて下さい。
et　lux　perpetua luceat　eis.　そして不断の光明が
そして 光が 不断の　照らしますように 彼らを.　彼らを照らしますように。
Te　decet　hymnus,　Deus, in　Sion,　神よ、シオンでは汝には
汝に ふさわしい 賛美歌が, 神よ, ～で シオン,　賛美歌がふさわしい、
et　tibi reddetur　votum　in　Jerusalem:　そしてイェルサレムでは、
そして 汝に 返報されるだろう 誓約された供え物 ～で イェルサレム: 汝に供え物が捧げられよう。

※シオンはダビデ王が攻撃、占領したイェルサレムの砦の名、イェルサレムと同意味に用

いられる。(旧約:サムエル記下5章6～7節、歌詞の出典は旧約:詩篇65篇1～3節)

exaudi　orationem meam,　私の祈りを聞き届けて下さい、
聞け届けよ 祈りを　私の,
ad　te　omnis　caro veniet.　全ての肉なるもの(＝人間)は、
～に向かって 汝に 全てのもの 肉の 来るだろう.　汝のもとに来るだろう。
Requiem aeternam dona　eis,　Domine:　主よ、彼らに永遠の平安を
平安を　永遠の　与えよ 彼らに, 主よ:　与えて下さい。
et　lux　perpetua luceat　eis.　そして不断の光明が
そして 光が 不断の　照らしますように 彼らを.　彼らを照らしますように。

Kyrie(主よ)　**あわれみの賛歌**

通常文。【開祭の儀式】において、改心の祈りに続いて唱える。三位一体を象徴して、神と、キリストと、聖霊に、それぞれ3回づつ憐れみを乞う。東方教会(現在のギリシャ正教)の祈りが転用されたので、この部分のみラテン語でなくギリシャ語である。これに続くグロリア(栄光の賛歌)は、死者のためのミサでは省略される。

Kyrie, eleison.　主よ、あわれんで下さい。
主よ,　憐れめ.
Christe,　eleison.　キリストよ、あわれんで下さい。
キリストよ, 憐れめ.
Kyrie, eleison.　主よ、あわれんで下さい。
主よ,　憐れめ.

Graduale(階段)　**昇階唱**

固有文。【ことばの典礼】の初め、新約聖書の使徒の書簡の朗読の後に、旧約聖書の内容を思い起こし、旧約の詩篇から選ばれた聖歌を歌う。gradually(段々と)と同じ語源。聖書朗読を行なう壇の上でなく、そこに至る階段で歌われることから名がきている。元来は最初に旧約聖書が朗読され、それに続いて使途書簡の朗読の前にこれが唱えられたが、旧約聖書朗読は5世紀にはすでに省略されるようになり(現在は復活している)、それに伴って位置も移動した。イントロイトゥスと似た内容で、正しい行ないをしていれば心配ないと祈る。

Requiem aeternam dona　eis,　Domine:　主よ、彼らに永遠の平安を
平安を　永遠の　与えよ 彼らに, 主よ:　与えて下さい。
et　lux　perpetua luceat　eis.　そして不断の光明が
そして 光が 不断の　照らしますように 彼らを.　彼らを照らしますように。
In　memoria aeterna erit　justus,　正しい人は永遠の記録の中に
～に 記録　永遠の　あるだろう 正しい人は,　とどめられ、
ab　auditione mala non　timebit.　悪い宣告(を受けること)を
～のために 宣告　悪い ない 恐れるだろう.　恐れることはないだろう。

※全ての人の行いは「生命の書」に永遠に記録されている。(新約:黙示録20章11～15節)

Tractus(一息で)　**詠唱**

固有文。【ことばの典礼】においてグラドゥアーレに続いて、次に読まれる福音書を歓迎して歌われる。通常の

ミサではここでハレルヤ唱が唱えられるが、死者のためのミサでは歓喜のことばハレルヤを控え、悲しみのことば詠唱を用いる。グラドゥアーレと異なり歌詞の繰り返しを行なわないので、「一息で」と呼ばれた。死者に恩寵を与え、最後の審判を免れるよう祈る。

Absolve, Domine, animas omnium fidelium defunctorum	主よ、全ての死せる
解き放て, 主よ, 魂を 全ての 信者たちの 死んだ	信者たちの魂を
ab omni vinculo delictorum.	全ての罪の絆から
～から 全ての 絆 罪の,	解放して下さい。
Et gratia tua illis succurrente,	そして汝の恩寵が彼らに
そして 恩寵が 汝の 彼らに 援助することによって,	援助することによって、
mereantur evadere judicium ultionis	彼らが最後の審判の罰からの
(彼らが)得させられますように 逃れること 審判を 復讐の	逃避と、
et lucis aeternae beatitudine perfrui.	永遠の光の喜びの享受を
そして 光の 永遠の 至福を 享受すること.	を得させられますように。

Sequentia(続き) **続唱**

固有文。【ことばの典礼】において、福音書の朗読の前にトラクトゥスに続いて歌われる。sequence(連続)と同じ語源。セクエンツィアには「スターバト・マーテル」(悲しみの聖母)を初め何種類かあるが、死者のためのミサで用いられるものは最初の言葉を取って「ディエス・イレ」(怒りの日)と呼ばれる。

文句はほかの部分と異なり3行づつの韻文で、3行×19節からなる長大なものである。作曲された場合、,全演奏時間の半分近くを占めることが多い。

この歌詞はミサの他の部分よりかなり遅く、13世紀になって作詞され、14世紀になってレクイエムに取り入れられたもので、中世キリスト教の特徴を多く残している。ミサの祈りは元来、父である神に対して行なわれるが、中世にはキリスト崇拝が盛んだったので、この部分はキリストに対しての祈りになっている。また会衆を集めず、修道士が個人的にミサを行なう当時の風潮を反映して、救済の対象として「彼らを」でなく「私を」が一貫して使われている。

歌詞は劇的で変化に富むので、多くの作曲家は全体を幾つかの曲に分け、内容に応じて編成や構成を大きく変化させながら作曲している。そのため、セクエンツィアという名前のつく特定の曲は無いことが多く、またディエス・イレという題名が全体でなく、冒頭の一部分のみを示すことも多い。

まず最後の審判の恐ろしさが描写される(1～6節)。ついで「私」が登場し、神とキリストに、自分が審判の結果地獄の劫火に焼かれることなく、聖人と共に楽園に行けるよう願う(7～17節)。最後に死者一般の平安を願う(18～19節)。最後の2節は、個人的な祈りであるこの詩を死者のためのミサに整合させるために、後からつけ加えられたものと思われる。韻律も、この6行のみは2行×3になっている。

1) Dies irae, dies illa	1)怒りの日、その日こそ
日 怒りの, 日 その	
Solvet saeclum in favilla:	世界は熱い灰の中に
(彼が)解き放つだろう 世界を ～の中に 熱い灰:	解き放たれるだろう。
Teste David cum Sibylla.	ダビデとシビッラが
証言によって ダビデ とともに シビッラ.	証言したように。

※ダビデは古代イスラエル2代目の王で、実質的建国者。詩人でもあり、多くの詩を旧約:詩

篇に残している。詩篇21篇9節に神の火による怒りが表現されている。シビッラはギリシャ・ローマにおけるアポロン神殿の巫女で、非キリスト教徒も同じ予言をしている例として対比されている。

2) Quantus tremor est futurus,
いかに大きく 震えること である 未来の,
Quando judex est venturus,
～の時 審判者 来ようとする,
Cuncta stricte discussurus!
全体を 厳しく 打ち砕かんとする.

2)未来にはどれほどの震えおののき
があるのだろうか？
審判者が

全てを厳しく打ち砕こうと
やって来る時には。

3) Tuba mirum spargens sonum
ラッパが 不思議な まき散らして 音を
Per sepulcra regionum,
～を貫いて 墓を 世界の,
Coget omnes ante thronum.
かり集める 全てを ～前に 王座の.

3)ラッパが
世界中の墓を貫いて
不思議な音をふりまいて、

全ての者を王座の前に
かり集める。

※新約:マタイ24章31節、コリント人への第一の手紙15章51～52節、黙示録11章15節

4) Mors stupebit et natura,
死は 驚くだろう そして 自然は,
Cum resurget creatura
～の際に 復活する 被造物(造られた人間たち)
Judicanti responsura.
審判者に 応答せんとする.

4)死と自然は驚くだろう、

造られた人間たちが

審判者に応えようと
復活する時に。

5) Liber scriptus proferetur,
書物 記された 提出されるだろう,
In quo totum continetur,
～中に その すべてを まとめられる,
Unde mundus judicetur.
それによって 世界は 裁かれる.

5)全てのことがまとめて記され、

それによって世界が裁かれる

書物が、提出されるだろう。

※「生命の書」のこと。これに然るべく名前が記されている人は永遠の生命を得て、光り輝く聖都イェルサレムに入ることができる(新約:黙示録20章11～15節、21章27節)。

6) Judex ergo cum sedebit,
審判者 従って ～の時に 座るだろう,
Quidquid latet, apparebit:
～のもの全て 隠れた, 明らかになるだろう:
Nil inultum remanebit.
全く無い 罰せられない 残るだろう.

6)従って、審判者が席につくとき、

隠された全てのものは明らか
になるだろう。
罰せられずに残るものは
全く無いだろう。

7) Quid sum miser tunc dicturus?
何を である あわれな その時 (私が)言おうとする ?
Quem patronum rogaturus,
誰を 弁護人に 依頼しようとする,
Cum vix justus sit securus?
〜の時に ほとんど〜ない 正しい人 である 心配のない ?

7)その時、あわれな私は
何を言おう？
誰を弁護人に依頼しよう？
正しい人ですら、ほとんど
安心してはいられない時に。

※全ての人が裁かれる身だから、誰にも弁護を依頼できない。予め主に祈るほかない。

8) Rex tremendae majestatis,
王よ 恐ろしい 威厳の,
Qui salvandos salvas gratis,
〜の人を 救われるべき (あなたは)救う 恵みをもって,
Salva me, fons pietatis.
救え 私を, 泉よ 慈悲の.

8)救われるべき人を
恵みをもって救われる
おそるべき威厳のある王
(＝御稜威：みいつの大王)よ、
私を救って下さい、
慈悲の泉よ。

9) Recordare, Jesu pie,
思い出せ, イエスよ 慈悲深い,
Quod sum causa tuae viae:
〜のことを である 理由は あなたの 旅行の:
Ne me perdas illa die.
〜しない 私を (あなたが)破滅させますように その 日に.

9)思い出して下さい、
慈悲深いイエスよ、
あなたが地上に下った理由
であるところのものを。
その日にあなたが私を
滅ぼしませんように。

※キリストの地上への旅行は、人々の罪をあがない、人々を救済するためであった。

10)Quaerens me, sedisti lassus:
(あなたは)探し求めて 私を, (あなたは)座った 疲れて:
Redemisti crucem passus:
(あなたは)賠償した 十字架を 苦しまされる:
Tantus labor non sit cassus.
こんなに大きな 辛苦は 〜しない でありますように 無駄

10)あなたは私を探し求め、
疲れて座り込んだ。
十字架に苦しまされて
(私の罪を)あがなって下さった。
これほどの大きな辛苦が
無駄でありませんように。

11)Juste judex ultionis,
正しい 審判者よ 復讐の,
Donum fac remissionis
贈り物 〜せよ 罪の許しの
Ante diem rationis.
〜の前に 日の 決算の.

11)罰を下したもう正しき審判者よ、
罪の許しの恩寵を与えて下さい、
決算の日の前に。

12)Ingemisco, tamquam reus:
(私は)うめく, あたかも〜のように 罪人:
Culpa rubet vultus meus:
罪が 赤くする 顔を 私の:

12)私は罪人のようにうめく。
罪が私の顔を赤くする。

Supplicanti parce, Deus.
嘆願者を　惜しめ，神よ.

神よ、嘆願する者を
惜しんで下さい。

13)Qui Mariam absolvisti,
～のもの（マグダラの)マリアを（あなたが)解放した,
Et latronem exaudisti,
そして 盗賊を　(あなたが)聞き届けた,
Mihi quoque spem dedisti.
私に ～もまた 希望を　(あなたが)与えた.

13)マグダラのマリアを許し、
盗賊を受け入れたあなたは、
私にもまた、希望を与えて
下さった。

※マグダラのマリアはキリストに「7つの悪霊」を追い出してもらった。(新約:ルカ8章1節)
盗賊とは、当時盗賊と蔑まれていた徴税請負人マタイを弟子に加えたり、徴税請負人や他の罪人たちと共に食事をしたりしたことを指すらしい。(新約:マタイ9章9～13節)

14)Preces meae non sunt dignae:
祈りは 私の ～でない である 価値のある:
Sed tu, bonus fac benigne,
しかし あなた，良く　～せよ 好意をもって,
Ne perenni cremer igne.
～しない 永遠に　焼かれる 火によって.

14)私の祈りは、価値のあるもの
ではない。
しかし主よ、
良くはからって下さい。
私が(地獄の)火によって永遠に
焼かれることの無いように。

15)Inter oves locum praesta,
～の中に 羊たち 場所を 履行せよ,
Et ab haedis me sequestra,
そして ～から 山羊たち 私を 隔離せよ,
Statuens in parte dextra.
立たせて ～に 方向に 右の.

15)羊たちの中に(私を)
置いて下さい、
そして山羊たちから私を
引き離して下さい、
(あなたの)右に立たせながら。

※羊は「牧者」であるキリストに保護されるが、山羊は神へのいけにえに用いられる。

16)Confutatis maledictis,
黙らされた者たちに 呪われた者たちに,
Flammis acribus addictis:
炎によって 激しい　判決が下されて:
Voca me cum benedictis.
呼べ 私を ～と共に 祝福された者

16)呪われ、弁解の口を封じられた
者たちに
激しい炎によって
判決が下されて(から)、
祝福された者と共に
私を呼んで下さい。

17)Oro supplex et acclinis,
(私は)懇願する 膝を屈して そして かがんで,
Cor contritum quasi cinis:
心　砕かれて　あたかも～のように 灰:
Gere curam mei finis.
心に抱け 注意を 私の 最期に.

17)私は膝を屈し、ひれ伏して祈る、
心は灰のように砕かれて。
私の最期に注意を払って下さい。

18)Lacrimosa dies illa,	18)その涙の日、
涙の多い　日　その	
Qua　resurget　ex　favilla	そのとき裁きを受けるべき
～のとき 復活するだろう ～から 熱い灰	罪人は、熱い灰の中から
Judicandus　homo reus.	よみがえるだろう。
裁きを受けるべき 人は 罪のある.	

※ほとんどの人は多かれ少なかれ罪がある。特定の罪人のことのみを示すのではない。

19)Huic　ergo　parce,　Deus:	19)だから神よ、この人を
この人を 従って 惜しめ, 神よ:	惜しんで下さい。
Pie　Jesu　Domine,	慈悲深い主、イエスよ、
慈悲深い イエスよ　主よ,	
Dona　eis　requiem.	彼らに平安を与えて下さい。
与えよ 彼らに 平安を.	
Amen	そうでありますように。
まことにまことに(ヘブライ語)	

Offertorium(捧げる)　**奉献唱**

固有文。【感謝の典礼】の初めに、キリストの体を記念するパンとぶどう酒を聖壇に捧げるための言葉である。offer(差し出す)と同じ語源。セクエンツィア同様中世に作られ、冒頭はキリストへの呼びかけで始まるが、本文はどちらかというと神への祈りになっている。前半 Domine Jesu, 後半Hostias に分かれて作曲されることが多い。ともに末尾は Quam olim Abrahae.で終わり、しばしば共通の主題で作曲される。

1)Domine Jesu　Christe,　Rex　gloriae,	主イエス・キリストよ、
主よ　イエス キリストよ, 王よ 栄光の,	栄光の王よ、
libera　animas omnium fidelium　defunctorum	全ての死せる信者たちの魂を
解放せよ 魂を　全ての 信者たちの 死んだ	
de　poenis inferni et　de　profundo lacu:	地獄の罰と底知れぬ洞穴より
～から 罰　地獄の　そして ～から 底知れぬ 洞穴:	解放して下さい。
libera　eas　de　ore leonis,	彼らをライオンの口から
解放せよ 彼らを ～から 口　ライオンの,	解放して下さい。

※底知れぬ洞穴には悪霊や、世界の最後に現われて人々に災いをもたらす怪物が住んでいるとされている。(新約:ルカ8章31節、黙示録9章2～11節、11章7節、20章1～3節)

※ライオンに襲われることは神の刑罰と考えられていた。また、死者が歩む道にはライオンがうろつき回っていると言われている。(ファウスト2部5幕11850行　など)

ne　absorbeat　eas　tartarus,	冥府が彼らを
～しない 飲み込みますように 彼らを 冥府が,	飲み込みませんように、
ne　cadant　in　obscurum:	彼らが暗闇に落ちませんように。
～しない (彼らが)落ちますように ～に 暗闇:	
sed　signifer sanctus Michael	そうでなく、旗手聖ミカエルが

そうでなく 旗手　　聖なる　ミカエルが
repraesentet　eas　in　lucem sanctam.　彼らを聖なる光の中に
導きますように 彼らを ～の中に 光　聖なる.　導いて下さいますように。
※ミカエルは天使の軍の総大将。(旧約:ダニエル書12章1～4節、新約:黙示録12章7節)
Quam　olim　Abrahae　promisisti　かつて汝がアブラハムと
～のように かつて アブラハムに (汝が)約束した
et　semini ejus.　その子孫に約束されたように。
そして 子孫に 彼の.
※神はアブラハムと契約を結び、信仰と引換にナイル川からユーフラテス川までの土地を彼とその子孫に与え、さまざまの恵みを授けた。(旧約:創世記14章18節、17章1～14節)

2)Hostias　et　preces tibi, Domine,　主よ、私たちは汝にいけにえと
いけにえを そして 祈りを 汝に, 主よ,
laudis offerimus:　祈りを捧げまつります。
誉めて (私たちが)捧げる:
tu　suscipe　pro　animabus illis,　今日私たちが記念する人々の
汝は 受け入れよ ～のために 魂たち　彼らの,
quarum　hodie memoriam facimus:　霊魂のために受け入れて下さい。
～のものを 今日　記念を　(私たちが)～する:
fac　eas,　Domine, de　morte transire ad　vitam.　主よ、彼らを死から生へと
～せよ 彼らを, 主よ,　～から 死　移せ　～に 生.　移して下さい。
Quam　olim　Abrahae　promisisti　かつて汝がアブラハムと
～のように かつて アブラハムに (汝が)約束した
et　semini ejus.　その子孫に約束されたように。
そして 子孫に 彼の.

Sanctus(神聖である)　**聖なるかな**

通常文。【感謝の典礼】において、司祭がキリストの救いのわざを述べる叙唱に続いて唱える。神の神聖さに感動するサンクトゥスを歌う間に、捧げられたパンのぶどう酒が司祭の祈りで聖体に変えられ(聖変化)、ベネディクトゥスで、パンとぶどう酒の形をとってやって来る主キリスト(あるいは、主の名によってやって来るパンとぶどう酒)を歓迎する。サンクトゥスは6世紀、ベネディクトゥスは7世紀から用いられている。多くの場合ベネティクトゥスの方が小篇成で、地味に作曲される。両曲の末尾のホザンナは共通の主題で作曲されることが多い。

Sanctus,　Sanctus,　Sanctus　Dominus Deus Sabaoth.　聖なるかな、聖なるかな、
神聖である, 神聖である, 神聖である 主は　神は 万軍の.　聖なるかな、万軍の神なる主は。
Pleni　sunt　coeli et　terra gloria tua.　天と地は汝の栄光に満ちている。
豊富な である 天は　そして 地は　栄光　汝の.
※天使セラフィムが預言者イザヤの前で言った言葉。(旧約:イザヤ書6章3節)
Hosanna　in　excelsis.　いと高きところに万歳。
万歳(ヘブライ語) ～に 高いところに.

Benedictus(祝福された)　　**ほむべきかな**

Benedictus, qui　　venit in　　nomine Domini.　　主の名によりて来たるものは
祝福された, ～のもの 来る　～によって 名前　主の　　祝福された。

※キリストがロバに乗ってイェルサレムに入るとき、群衆がシュロの枝を振りながら歓迎して叫んだ言葉。(新約:ヨハネ12章13節、ほか。旧約:詩篇118篇26節が原典。)

Hosanna　　in　excelsis.　　いと高きところに万歳。
万歳(ヘブライ語) ～に 高いところに.

Pie Jesu　　**慈悲深いイエス**

通常文の変形。【交わりの儀】において、アニュス・デイの前につけ加えて唱えられる。アニュス・デイと同じ意味あいで、キリストをピエ・イエズ(慈悲深いイエス)と呼び、永遠の平安を願う。

Pie　Jesu,　Domine, qui　tollis　peccata mundi:　　世の罪を除きたもう
慈悲深い イエスよ, 主よ,　～の人 取り除く 罪を　世界の:　　慈悲深いイエスよ、
dona　eis　requiem.　　彼らに平安を与えて下さい。
与えよ 彼らに 平安を.
dona　eis　requiem sempiternam.　　彼らに永遠の平安を
与えよ 彼らに 平安を　永遠の.　　与えて下さい。

Agnus Dei(神の小羊)　　**平和の賛歌**

通常文。【交わりの儀】において、聖体拝領の前に唱える。キリストの象徴である聖体となったパンを、「バプテスマのヨハネ」がキリストに会ったときに言った言葉にちなんで「神の小羊」と呼び(新約:ヨハネ1章29節)、人類のためにいけにえとなったキリストに永遠の平安を願う。この曲の間に、司祭は聖体を分ける準備をする。7世紀末から使われている詩である。通常のミサでは「我らに平和を」のところが、ここでは「彼らに平安を」に変わっている。

Agnus　Dei,　qui　tollis　peccata mundi:　　世の罪を除きたもう
小羊よ 神の, ～の人 取り除く 罪を　世界の:　　神の子羊よ、
dona　eis　requiem.　　彼らに平安を与えて下さい。
与えよ 彼らに 平安を.
dona　eis　requiem sempiternam.　　彼らに永遠の平安を
与えよ 彼らに 平安を　永遠の.　　与えて下さい。

※キリストは十字架にかかることで世界の人々の罪をあがない、取り除いた。

Communio(共有、交わり)　　**聖体拝領唱**

固有文。聖体拝領の間に歌われる音楽である。信者は並んで司祭の前に進み出て、パン(ホスチア)を拝領する。死者の永遠の平安を願う、イントロイトゥスに近い内容になっている。

Lux　aeterna luceat　　eis,　Domine:　　主よ、永遠の光明が彼らを
光が 永遠の　照らしますように 彼らを, 主よ:　　照らしますように、
cum　Sanctis　tuis in　aeternam:　　汝の聖人たちとともに永遠に。

～と共に 聖人たち 汝の ～の中に 永遠の:
quia pius es. 汝は慈悲深いゆえに。
なぜならば 慈悲深い (汝は)である.
Requiem aeternam dona eis, Domine: 主よ、彼らに永遠の平安を
平安を 永遠の 与えよ 彼らに, 主よ: 与えて下さい。
et lux perpetua luceat eis. そして不断の光明が
そして 光が 不断の 照らしますように 彼らを. 彼らを照らしますように。

Absolutio (解放、赦免) **赦祷唱**

ミサそのものではなく、ミサの終了後に歌われる。9世紀頃作られ、セクエンツィアの元になっていると思われる。最後の審判の恐怖を思いだし、参加者自身の救いと、死者の平安を祈る。セクエンツィアと並んで、「彼らを」のかわりに「私を」が用いられる。この祈りの間に棺に聖水がまかれる。

Libera me, Domine, 主よ、その恐ろしい日に
解放せよ 私を, 主よ,
de morte aeterna in die illa tremenda; 永遠の死から私を
～から 死 永遠の ～に 日 その 恐ろしい; 解放して下さい。
quando coeli movendi sunt et terra; 天と地が揺れ動くとき、
～の時 天は 揺れ動くこと である そして 地は;
dum veneris judicare saeclum per ignem. 世界を火によって裁きに
～の時 (汝が)来ただろう 裁きに 世界を ～によって 火を. 汝が来るそのときに。
Tremens factus sum ego, et timeo, 私は震えおののかされた、
震える ～された 私は, そして 恐れる, そして恐れる、
dum discussio venerit atque ventura ira. 審判と、その後に来る怒り
～の時 審判が 来ただろう その上なお 将来の 怒りが. までもが来るそのときに。
Dies illa, dies irae calamitatis et miseriae; その日こそ怒りの日、禍いの日、
日 その, 日 怒りの 禍いの そして 不幸の; そして不幸の日。
dies magna et amara valde. 偉大な、そしてとても
日 偉大な そして 苦い とても 苦々しい日。

Requiem aeternam dona eis, Domine: 主よ、彼らに永遠の平安を
平安を 永遠の 与えよ 彼らに, 主よ: 与えて下さい。
et lux perpetua luceat eis. そして不断の光明が
そして 光が 不断の 照らしますように 彼らを. 彼らを照らしますように。

In paradisum **天国にて**

ミサ終了後、出棺の際に歌われる音楽。故人が天国へ行けるよう願う。礼拝のすんだ後であるので、この詩はレクイエムの歌詞中唯一、神でもキリストでもなく、その日葬られる故人当人への呼びかけになっている。

In paradisum deducant te angeli; 天使たちが君(＝死んだ人)
～に 天国 連れて行きますように 君を 天使たちが; を天国に連れて行きますように。

in tuo adventu suscipiant te martyres, 君が着くとき、殉教者たちが
～に 君の 到着 受入れますように 君を 殉教者たちが 君を迎え、
et perducant te そして君を聖なる
そして (彼らが)案内しますように 君を イェルサレムの町へ
in civitatem sanctam Jerusalem. 案内しますように。
～の中へ 町 聖なる イェルサレムの.

※聖都イェルサレムは最後の審判ののち天から下ってきて、「生命の書」に名前の書かれている救われた人々を収容する。(新約:黙示録21章2節、10～27節)

Chorus angelorum te suscipiat, 天使たちの合唱が君を
合唱が 天使たちの 君を 受け入れますように, 迎えますように、
et cum Lazaro quondam paupere そしてかつて貧乏であった
そして ～と共に ラザロ かつて 貧乏な ラザロと共に、
aeternam habeas requiem. 永遠に平安を保ちますように。
永遠に 持ちますように 平安を.

※ラザロはキリストの行なったたとえ話に出てくる乞食。不信心なある金持ちは地獄に落ちたが、この家に寄生していた乞食ラザロは行ないが正しかったので天国に上った(新約:ルカ16章19～31節)

第3章　よく用いられる祈り

Oratio dominica　　**主の祈り**

イエス・キリスト自らが弟子たちに教えた神への祈り。新約:マタイ6章9～13節に全文が、ルカ11章2～4節に短い形が出ている。前半3つの文で神の国が来ることを待望し、後半4つの文で神の国到来までの日々の生活に必要な恵みを祈る。Quia以下の最後の一文は聖書に示された祈りにはなく、副文として祈りを補う形で用いられる。プロテスタントでは副文も含めて一つの祈りとして唱え、日本語訳の文体も異なるが、内容は全く同一である。

Pater noster, qui　es　in　caelis:	天にまします我らの父よ、
父よ　我らの, ～の人 (汝は)ある ～に 天:	
sanctificetur　nomen　tuum;	願わくばみ名の
神聖にされますように 名前が 汝の;	とうとまれんことを。
adveniat　regnum tuum;	み国の来たらんことを。
到着しますように 国が　汝の;	
fiat　voluntas tua,	み旨の天に行なわるるごとく、
行なわれますように 意志が　汝の,	
sicut　in　caelo, et　in　terra.	地にも行なわれんことを。
～のごとく ～で 天,　そして ～で 地. 2	
Panem　nostrum cotidianum da　nobis　hodie;	我らの日用のかてを、
パンを 我らの　日々の　与えよ 我らに 今日;	こんにち我らに与えたまえ。
et　dimitte　nobis　debita nostra,	我らが人に許すごとく、
そして 放免せよ 我らに 債務を 我らの,	
sicut　et　nos　dimittimus debitoribus nostris;	我らの罪を許したまえ。
～のごとく そして 我らが 放免する　債務を　我らの;	
et　ne　nos　inducas　in　tentationem,	我らを試みに引きたまわざれ。
そして ～しない 我らを　導きますように ～に 試験,	
sed　libera　nos　a　malo.	我らを悪より救いたまえ。
そうでなく 解放せよ 我らを ～から 悪.	
Quia　tuum　est　regnum, et potestas,	国と力と栄光は、限りなく
なぜならば 汝のもの である 国は,　と 力は,	
et gloria in　saecla.	あなたのもの。
と 栄光は ～に 永遠.	

Ave Maria(めでたしマリア)　　**天使祝詞**

イエス・キリストの母であるマリアを神聖視する記述は聖書にはない。しかしキリスト教が広まる過程において土俗宗教の女神信仰が影響を与えたのか、カトリックではマリアを無原罪の聖母として崇拝し、マリアへの祈りが作られ、教会には子供を抱いたマリアの像(聖母子像)が置かれる。聖書のみに典拠する原典主義に立つプロテスタントでは、マリアを崇拝することはない。

この祈りは4世紀には原形が作られ、11世紀には聖母関連のミサの中で、アレルヤ唱などに用いられるようになった。字句の変更を経て、15世紀には主の祈りに次ぐ重要な祈祷文として位置づけられた。

Ave Maria, Gratia plena, Dominus tecum, めでたし聖寵満ち満てるマリア、
おめでとう マリア, 寵愛 豊富な, 主は 汝とともに, 主、御身とともにまします。

※天使がマリアにイエスを身ごもったことを告げた際のことば。(新約:ルカ１章28節)

benedicta tu in mulieribus, 御身は女のうちにて祝せられ、
祝福される 汝は ～の中で 女たち,
et benedictus fructus ventris tui, Jesus. 御胎内の御子イエズスも
また 祝福される 果実 腹の 汝の, イエス. 祝せられたもう。

※マリアの親戚のエリザベツがマリアを祝福して言ったことば。(新約:ルカ1章42節)

Sancta Maria, mater Dei, 天使の大母,聖マリア、
聖なる マリアよ, 母よ 神の,
ora pro nobis peccatoribus, 罪深い我らのために
祈れ ～のために 我らに 罪人たちに, 神に祈って下さい。
nunc, et in hora mortis nostrae. 今も、そして我らの臨終の時も。
今, そして ～に 時間 死の 我らの.
Amen. アーメン。

Ave Verum Corpus **まことのみ体**

聖体拝領の際に用いられる言葉。聖体拝領は最後の晩餐(新約:マタイ26章26～29節、マルコ14章22～25節、ルカ22章17～20節)を追体験するもので、イエス・キリストの体の象徴であるパンをみなで食べることによって、神と信者、信者と信者の結びつきを確認する。キリストの体を食べる者には、永遠の生命と世の終わりでの復活が約束されている(新約:ヨハネ6章54～59節)。

最後の一節は直訳すれば「あなたは私たちに食べられて下さい」であるが、これは「私たちと結びついていて下さい」というのと同じことである。作詞者は不明である。

Ave verum Corpus, natum de Maria Virgine, めでたし、まことのみ体、
おめでとう 真実の 体が, 生まれた ～から マリア 処女の, 処女マリアから生まれ、
vere passum, 人類のためにまことに
まことに 苦しまされた, 苦しまされ、
immolatum in cruce pro homine. 十字架上でいけにえに
いけにえにされた ～で 十字架 ～のために 人類. されたみ体。
Cujus latus perforatum unda fluxit et sanguine; その人の突き刺された脇腹は
その人の 横腹が 突き刺された 波を 流れた と 血を; 波のような血を流し出した。
Esto nobis praegustatum in mortis examine. 私たちは死の試練の際に
(汝は)であれ 私たちに 食される ～に 死の 試練. み体を拝領できますように。

※十字架につけられたイエスは、槍で横腹を刺されている。(新約:ヨハネ19章34節)

第 4 章
マーラー　交響曲第 8 番　第一部
Veni, Creator Spiritus　来たれ、創造主、聖霊よ

(伝 Rabanus Maurus : ラバヌス・マウルス (776-856) 作)

※ラテン語では語順をどう替えても意味は変わらないので、曲中では歌詞の単語の順序が場所によってパートによってまちまちである。ここでは代表的と思われる語順に合わせた。
※歌詞は原詩通りでなく、曲に従って順序の入れ替え、重複を行った。逐語訳の前の数字は、その歌詞に関連する練習番号を示す。

(1990.11　Tn.　Ito)

単語の意味	と	逐語訳
Veni,　creator　spiritus.		0 来たれ、創造主、聖霊よ。
来たれ, 創造主よ 聖霊よ.		
Mentes　tuorum　visita.		5 汝の精神を訪れたまえ。
精神たちを あなたの 訪れよ.		
Imple　superna　gratia,		7 いと高き恵みにて満たしたまえ、
満たせ 高い所にある 恵みで,		
quae　tu　creasti　pectora.		あなたが心を創造した者たちを。
～のものたちを あなたが 創造した 心たちを.		（＝私たち人間を）
Qui　Paraclitus diceris,		12 守護者と呼ばれるもの（＝聖霊）よ、
～のもの 守護者と　呼ばれる,		
Donum　Dei　altissimi,		至高の神の贈り物,
贈り物 神の 至高の,		
Fons vivus,　ignis, caritas,		生命の泉、火、慈愛にして、
泉　生命の, 火,　慈愛,		
et　spiritalis unctio.		霊の聖油を注ぐものよ。
そして 霊の　聖油を注ぐこと.		
Veni,　creator,		15 来たれ、創造主よ、
来たれ,　創造主よ,		
imple　quae　tu　creasti　pectora,		あなたが心を創造した者たちを満たせ、
満たせ ～のものたちを あなたが 創造した 心たちを,		
superna　gratia.		いと高き恵みで。
高い所にある 恵みで.		
Infirma nostri corporis,		19,30 我々の肉体の弱さを、
弱さを　我々の 肉体の,		
virtute firmans perpeti,		不断の勇気で力づけて、

勇気で　力づけて 不断の,
Accende lumen sensibus.　33,38 (我らの)感覚に光をともしたまえ、
ともせ　光を　感覚たちに.
Infunde amorem cordibus.　心に愛を注ぎたまえ。
注げ　愛を　心たちに.

Hostem repellas longius.　42 敵をより遠くに排斥したまえ、
敵を　排斥せよ より遠くに.
Pacemque protinus dones.　そして絶えず平和を与えたまえ。
そして平和を 絶えず　与えよ.　(※pacemqueは、et pacemと同じ意味。)
Praevio te ductore sic　46 されば先行するあなたに導かれて、
先行する あなたによって 導かれて そうしたら
vitemus omne pessimum.　我々はすべての悪を
(我々は)避けよう すべての 極悪を.　避けよう。

Munere tu septiformis　48 あなたが(我々に)七重に贈る物は、
贈るものは あなたが 七重に
digitus paternae dexterae.　父なる神の幸いの指(である)。
指　父の　幸いの　(である).

Per te sciamus da Patrem　52 あなたのおかげで我々は
～のおかげで あなた (我々は)知る　父を　父なる神を知り、
Noscamus da Filium.　子なる神(キリスト)を認識する。
(我々は)認識する　子を.
Credamus Spiritum omni tempore.　53 我々はいつでも聖霊を信じる。
(我々は)信じる 聖霊を　すべての 時に.

Accende lumen sensibus.　56 (我らの)感覚に光をともしたまえ、
ともせ　光を　感覚たちに.
Infunde amorem cordibus.　心に愛を注ぎたまえ。
注げ　愛を　心たちに.

Spritus, veni, o veni, creator spiritus.　63 聖霊よ、おお来たれ、創造主、聖霊よ。
聖霊よ,　来たれ, おお 来たれ, 創造主よ, 聖霊よ.
Qui Paraclitus diceris,　69 守護者と呼ばれるもの(＝聖霊)よ、
～のもの 守護者と　呼ばれる,
donum Dei altissimi,　至高の神の贈り物よ。
贈り物 神の 至高の,

Da gaudiorum praemia,　71 喜びの賜物を与えたまえ、
与えよ 喜びの　賜物たちを

Da gratiarum munera; 恵みの贈り物を与えたまえ、
与えよ 恵みの 贈り物たちを
Dissolve litis vincula, 72 争いの桎梏(くびき)から解放したまえ、
解放せよ 争いの 桎梏(くびき)を
Adstringe pacis foedera. 74 平和の契約を堅く結びたまえ。
堅く結べ 平和の 契約を.

Pacem protinus, 72 絶えず平和を
平和を 絶えず,
pacemque protinus dones. 74 そして絶えず平和を与えたまえ。
そして平和を 絶えず 与えよ.
ductore sic te Praevio. されば先行するあなたに導かれて、
導かれて そうしたら あなたによって 先行する.

Hostem repellas. 77 敵を排斥せよ。
敵を 排斥せよ.
Sic vitemus omne pessimum. 78 そうしたら我々は、
そうしたら (我々は)避けよう すべての 極悪を. すべての悪を避けよう。

Gloria Patri Domino. 83 主なる父に栄光あれ。
栄光 父に 主に (あれ).
Gloria sit Domino. 84 主に栄光あれ。
栄光 あれ 主に.
ﾅｯﾄｳ ｸｴ
Natoque, qui a mortuis surrexit, 85 そして死者の中からよみがえった
そして息子に, ～のもの ～から 死者たち よみがえった, 息子(＝キリスト)に(栄光あれ)。
ac Paraclito. そして守護者(＝聖霊)に(栄光あれ)。
そして 守護者に.
Deo sit Gloria et Filio qui surrexit 86 神に栄光あれ、そして
神に あれ 栄光 そして 子に ～のもの よみがえった 死者の中からよみがえった
a mortuis, ac Paraclito. 子と、守護者に(栄光あれ)。
～から 死者たち, そして 守護者に.

Gloria Domino Patri in saeculorum saecula. 89 世々の終わりまで、主なる父に
栄光 主に 父に ～に 世紀の 世紀に(＝いつまでも). 栄光あれ。
Gloria Patri. 90 父に栄光あれ。
栄光 父に.

補注： 創造主、父である神と、子であるキリスト(十字架で処刑されてから、よみがえった)、そして聖霊は、神という一つの存在の三側面とされる(三位一体の教義)。聖霊は神から人間への働きかけのようなものである。ふつうの人間に神自身が直接下ることはなく、神からの作用は聖霊を通じて人間に伝えられる。

訳に際しての補注。
※複数形の名詞は、それとわかるよう無理矢理「たち」をつけて訳した。
※名詞の格(主格、目的格など)は、助詞を補って表現した。形容詞の格は、それの形容する名詞の格と同じなので、特に表現しなかった。
※ラテン語は主語をよく省略し、動詞の語尾変化で行為者を表わすので、必要に応じて()内に補った。
※命令語には命令形によるものと、接続法によるものがあるが、煩雑になるので区別しなかった。
※英語のbe動詞にあたる動詞は、よく省略されるので適当に補った。

マーラー　交響曲第８番　第二部
Faust(ファウスト) 第二部 第五幕 終場面 「山峡、森、岩、荒涼の地」(11844-12111行)

(Johann Wolfgang von Goethe : ゲーテ(1749-1832) 作)

【直前までのあらすじ】　知識の無力に絶望した学者ファウストは、悪魔メフィストフェレスに出会い、悪魔の力をかりて最高の満足を得ることができたら、魂を渡すという契約をする。悪魔はまず官能的享楽の追求にファウストを導いた。結果としてファウストは、一途に自分を愛する少女グレートヘンを誘惑し、嬰児殺しへと転落させてしまう(第一部)。反省したファウストは宮廷に入り、皇帝の信頼を得る。美を追求し、暝界から呼び出したギリシャの美女ヘレナを得るが、もうけた子は戦いに身を投じて死に、悲しみに沈んだヘレナは再び暝界に去る(第二部1-3幕)。彼はついで社会のための創造的活動に意義を認め、海岸沿いの不毛の地を干拓し、繁栄させる。「自由な土地に自由な民と共に住む」という理想に満足を感じたとき、彼は契約通り死に、魂を悪魔に渡す。しかしファウストの達した境地は、悪魔の誘惑にも関わらず天の理想にあい通じるものであった(第一部序曲)ので、主は天使を遣わした。天使のまくバラの花は悪魔の身を焼き、ファウストは天に救い出される(第二部4-5幕)。

※簡単のため、独唱のみの部分は省いた。ＣＤ等の対訳を参照されたい(怠慢ですみません)。
※歌詞は原詩通りでなく、曲に従って順序の入れ替え、重複を行った。数字は関連する練習番号を示す。
※＊のついた単語は、分離動詞の前つづりを示す。
※a は不定冠詞、the は定冠詞、(完) は完了の助動詞を示す。
※ドイツ語は複数の単語が合体して一つの語をつくるので、一語に複数の意味が記してあることがある。

(1990.11　Tn.　Ito)

単語の意味	と	逐語訳
==Chor und Echo==		＝隱者の合唱と、こだま＝
Waldung, sie schwankt heran,		24 森(の梢)はこちらへ揺れてなびき、
(森, それは 揺れている こちらへ,		
Felsen, sie lasten dran,		岩は森に重くのしかかる。
岩, それは 重くのしかかる それに,		
Wurzern, sie klammern *an,		木の根はからみつき、
木の根たち, それらは しがみつく,		
Stamm dicht an Stamm hinan,		26 幹は互いにぎっしりならんでそびえる。
幹は ぎっしりと並ぶ ～に 幹 上へ,		
Woge nach Woge spritzt,		波は互いに追いかけながらほとばしり、

波は 〜の後を 波　ほとばしる,
Ho"hle, die tiefste, schu"tzt; いと深い洞穴はひっそりと身を隠す。
洞穴は, それは とても深い, 身を守る;
Lo"wen, sie schleihen stumm, 29 獅子たちは我々の回りを、声も立てず
ライオンたち, それらは 忍び足で歩く 黙って,
Freundlich um uns herum, 親しげに忍び歩き、
親しげに　回りを 我々の　回って,
Ehren geweihten Ort, 神聖なる場所、
あがめる 神聖にした 場所,
Heiligen Liebeshort. 聖なる愛のすみかをあがめる。
聖なる　愛のすみかを.
==Pater Ecstaticus== 32 ＝法悦の神父＝
==Pater Profundus== 39 ＝瞑想の神父＝
※天使に似た神父と昇天した少年たちの対話(11890-11933行)は、作曲者がカット。

==Engel== ＝天使＝
Gerettet ist das edle Glied 56 霊の世界の気高い一員が、
救われた (完) the 気高い 会員が
Der Geisterwelt vom Bo"sen: 悪から救われた。
the 霊の世界の　〜から 悪:
Wer immer strebend sich bemu"ht, 57 >絶えず努め、励む者を、
〜の人は いつも 努力する 自ら 励む,
Den ko"nnen wir erlo"sen;< 我らは救うことが出来る。<
〜の人を 〜出来る 我々は 救う;
Und hat an ihm die Liebe gar そのうえ彼には、天上からの愛が
そして (完) 〜に 彼　the 愛が　そのうえ
Vom oben teilgenommen, 加えられた。
〜から 上(天上) 加わった,
Begegnet ihm die sel'ge Schar 祝福された人びとの群れが、
迎えるだろう 彼を the 死んで祝福された 群衆が
Mit herzlichen Willkommen. 心からの歓迎とともに
〜とともに 心からの　歓迎. 彼を迎えるだろう。

==Chor Seliger Knaben== ＝昇天した少年たちの合唱
Ha"nde vershclinget euch 58 手を組もう、
手を　組もう　君たちと
Freudig zum Ringverein, 楽しく輪になって。
楽しく　〜に 輪
Regt euch und singet 動いて歌おう、
動かそう 君たちを そして 歌おう
Heil'ge Gefu"hle drein! 聖なる心を！

聖なる　感情　　その中へ
Go"ttlich　belehret.　　神の教えを受けたのだから。
神より出た 教えたので.
Du"rft　ihr　vertrauen;　　信用してよい、
～してよい 君たちは 信用する;
Den　ihr　verehret,　　君たちは崇拝するものを
～のものを 君たちが 崇拝する,
Werdet ihr schauen.　　見るだろう。
～だろう 君たちが 見る.

ﾀﾞ ｲｴｯﾄﾉｳﾀ
==Die Ju"ngeren Engel==　　＝若い(未成熟の)天使たち＝
Jene Rosen, aus　den Ha"nden　　63 愛に富む聖なる贖罪の女たちの
あの バラ,　～より the 手
Liebend-heil'ger Bu"@erinnen,　　手から授けられたあのバラが、
愛する－聖なる　贖罪する女たち,
Halfen uns　den Sieg　gewinnen　　私たちを助けて勝利を得させ、
助けた 我々を the 勝利を 得る
Und　das hohe Werk　vollenden,　　高貴な仕事を完了させ、
そして the 高い 仕事を 完了する,
Diesen　Seelenschatz erbeuten.　　65 この魂の宝を獲得させてくれた。
これらの 心の　宝物を 捕獲する.
Bo"se　wichen,　als　wir　streuten,　　私たちが(バラを)ふりまくと
悪人は 敗退した, ～すると 我々が ふりまいた,　　悪人は敗退し、
Teufel flohen, als　wir　trafen.　　私たちが(バラを)命中させると
悪魔は 逃げた, ～すると 我々が 命中させた.　　悪魔は逃げ出した。
Statt　gewohnter Ho"llenstrafen　　なじみの地獄の刑罰のかわりに、
～のかわりに なじみの　地獄の刑罰
Fu"hlten Liebesqual die Geister;　　70 (悪)霊たちは愛の苦痛を感じたのだ。
感じた　愛の　苦痛 the 霊たち;
Selbst　der alte　Satans-Meister　　年老いた悪魔の親方
～自身も the 年老いた 悪魔の 親方　　(メフィストフェレス)自身までも、
War　von　spitzer　Pein durchdrungen.　　刺すような痛みに身を貫かれた。
(完) ～から 刺すような 痛み 一杯である.
ﾔ ｯ ｾ ﾀｰ
Jauchzet auf!　es　ist　gelungen.　　72 歓声をあげよう。うまくいったのだ。
歓声をあげよう それは である 成功した.

==Die vollendeteren Engel==　　＝完成した(成熟した)天使たち＝
Uns　bleibt　ein Erdenrest　　76 地上の残りかすを運ぶのは、
我々には ずっと～である a　地上の残りかすを

Zu tragen peinlich. 私たちにはつらい。
運ぶこと 苦痛.
Und Wa"r' er von Asbest たとえ石綿から出来ていても、
そして たとえ～であっても それが ～製 石綿
Er ist nicht reinlich. それは清浄ではない。
それは である ない 清浄.
Wenn starke Geisteskraft もし強力な霊の力が
もし～なら 強力な 霊の 力が
Die Elemente 諸々の元素を
the 元素たちを
An sich herangerafft, わが身にかき集めていると、
～に 自身に そばへ集める,
Kein Engel trennte 78 どんな天使も分けられなかった、
ない 天使が 分けた
Geeinte Zwienatur 密接につながって一体化した二重体を。
一体化した 二重体を
Der innigen beiden,
the 心から つながった,
Die ewige Liebe nur 79 永遠の愛だけが、
the 永遠の 愛 ～だけが
Vermag's zu scheiden. 引き離す能力がある。
能力がある 引き離すこと.
Die ewige Liebe nur. 永遠の愛だけが。

==Die Ju"ngeren Engel== ＝若い(未成熟の)天使たち
Ich spu"r' soeben, 81 私はたった今感じる、
私は 感じる たった今
Nebelnd im Felsenho"h', 岩の頂きを霧のようにたなびき、
霧のようにたなびき ～に 岩の 頂き,
Ein Geisterleben, 私の近くで動く、霊の息吹を。
a 霊の 息吹,
Regend sich in der Na"h'.
動く 自身で ～に the 近くを.
Seliger Knaben 昇天した少年たちの
昇天した 少年たちを
Seh' ich bewegte Schar. 心動かされる一群を、私は見る。
見る 私は 感動させる 一群を.
Los von der Erde Druck 地上の重荷から離れ、
れた ～から the 地上の 重荷
Im Kreis gesellt, 環になって仲間になる、
～に 環 仲間になった,

Die sich erlaben 83 天上の世界の新しい春と装飾にふれて
～のものを 自身を 元気を快復する
Am neuen Lenz und Schmuck 元気を快復したものを
～に 新しい 春 と 装飾
Der obern Welt.
the 天上の 世界の.
Sei er zum Anbeginn, 84 彼(昇天したファウスト)も、手始めに、
～であれ 彼は ～に 始め,
Steigendem Vollgewinn, この少年たちの仲間に入って、
高みに上る 一杯に益のある,
Diesen gesellt! 充実した高みに上るといい。
彼らの 仲間に入って

==Doctor Marianus== 84 ＝マリア崇拝の博士＝
==Chor Seliger Knaben== ＝昇天した少年たちの合唱
Freudich empfangen wir 85 僕たちは、蛹の状態にあるこの人を
喜んで 迎える 我々は
Diesen im Puppenstand; 喜んで迎えよう。
この人を ～の中の 蛹の 状態;
Also erlangen wir これで僕たちは
つまり 手に入れる 我々は
Englisches Unterpfand. 天使の質草を手に入れることになる。
天使の 質草を.
Lo"set die Flocken los, 彼を取り囲む繭も
解くべきである the 繭 離れて,
Die ihn umgeben! 取り去ってさしあげたいものだ。
～のもの 彼を 取り囲む.
Schon ist er scho"n und Gro@ 87 彼はすでに神聖な生活によって、
すでに ～である 彼は 美しい そして 大きい
Von heiligem Leben. 美しく、大きくなられている。
～のために 神聖な 生活.

==Doctor Marianus und Chor== ＝マリア崇拝の博士(と合唱)＝
Jungfrau, rein im scho"nsten Sinne, 100 最も美しい意味での淨き乙女、
若い女, 純粋な ～の中の 最も美しい 意味,
Mutter, Ehren wu"rdig 崇拝するにふさわしい御母、
母, 尊敬 値する
Uns erwa"hlte Ko"nigin, 我々のために選ばれた女王、
我々に 選ばれた 女王
Go"ttern ebenbu"rtig. 神々と同じ身分の方。
神々の 同じ身分の.

==Chor(Doctor Marianus)== ＝合唱(原詩ではマリア崇拝の博士)＝

Dir, der Unberu"hrbaren, 109 触れることの出来ないあなたに、
あなたに, ～のもの 触れられない,
Ist es nicht benommen, 禁じられてはいない、
である それは ない 奪われる,
Da die leicht Verfu"hrbaren 誘惑に乗りやすい人が
～のこと the 軽率な 誘惑にのる人
Traulich zu dir kommen. あなたにすがって来ることは。
くつろいで ～に あなた 来る.
In die Schwachheit hingerafft, 弱みにはまり込んだあの人たちを
～の中に the 弱さ 連れ去られた,
Sind sie schwer zu retten. 救うことは難しい。
である 彼らは 難しい 救うこと.
Wer zerreisst aus eig'ner Kraft 誰が自分自身の力で
誰が 引き裂く ～で 自分自身の 力
Der Gelu"ste Ketten? 情欲の鎖を断ち切れるだろうか？
the 情欲の 鎖を?
Wie entgleitet schnell der Fu@ どんなに早く足が滑るだろう、
どんなに 滑る はやく the 足が
Schiefem, glattem Boden? 斜めになったつるつるの床では？
斜めになった, つるつるの 床?

==Chor der Bu"sserinnen== ＝贖罪の女たちの合唱＝

Du schwebst zu Ho"hen 114 永遠の国の高いところに
あなたよ 漂う ～に 高いところ
Der ewigen Reiche, 漂う御方よ、
the 永遠の 国の,
Vernimm das Flehen, 我らの願いを聞き届けたまえ、
聞け the 嘆願を,
Du Gnadenreiche! 情け深い御方よ、
あなたよ 情け深い
Du Ohnegleiche! 比べようもない御方よ！
あなたよ 比肩するもののない

==Magna Peccatrix== 117 ＝とても罪深い女(マグダラのマリア)＝
==Mulier Samaritana== 121 ＝サマリアの女＝
==Maria Aegyptiaca== 128 ＝エジプトのマリア＝
==Zu Drei== 136 ＝三人に＝
==Una Poenitentium (Gretchen)== 149 ＝贖罪の女の一人(グレートヘン)＝

==Selige Knaben==　　＝昇天した少年たち＝
Er　u"berwa"chst uns　schon　　154 彼(昇天したファウスト)はすでに
彼は おい茂る　我々を すでに　　たくましい手足で
An　ma"cht'gen　Gliedern,　　僕たちよりも大きくなられた。
～に たくましい 手足,
Wird　treuer Pflege Lohn　　忠実にお世話した報いを
～だろう 忠実な 世話　報酬
Reichlich　erwidern.　　たっぷりお返ししてくれるだろう。
たっぷりと お返しをする.
Wir　wurden　fru"h　enternt　　僕たちは早くに
我々は ～なった 早くに 引き寄せられた
Von　Lebecho"ren,　　人の世の群れから
～から 生活の 群れ,　　(天に)引き寄せられたが、
Doch　dieser　hat　gelernt:　　この方はいろいろ学ばれている、
しかし この人は (完) 学んだ:
Er　wird　uns　lehren.　　僕たちにいろいろ教えてくれるだろう。
彼は だろう 我々を 教える.

==Una Poenitentium (Gretchen)==　　164 ＝贖罪の女の一人(グレートヘン)＝
==Mater Gloriosa==　　172 ＝栄光の聖母＝
==Doctor Marianus==　　176 ＝マリア崇拝の博士＝

ｼｵﾋｶﾞﾘﾉｳﾀ
2==Chor==　　＝合唱(エコー)＝
ｺﾝﾌﾞ
Komm!　　マリア175 来たれ
来い
ﾐｰｯｹﾀｰ
Blikket auf!　　博士　183 仰ぎ見よ！(救い手マリアの目を)
仰ぎ見よ!
Alle　Reuig　Zarten!　　すべての悔い改めた優しき人々よ！
すべての 後悔している 優しい人々よ!
Werde jeder　bess're Sinn　　博士　187 より良き心の人それぞれが、
～なれ それぞれの より良い 心が
Dir　zum　Dienst erbo"tig;　　あなた(マリア)に奉仕を
あなたに ～を 奉仕　申し出る;　　申し出ますように。
Jungfrau, Mutter, Ko"nigin,　　190 若き乙女よ、御母よ、女王よ、
若い女よ, 母よ,　女王よ,
Go"ttin, bleibe　gna"dig!　　女神よ、ずっと恵み深くあれ！
女神よ, ずっと～であれ 恵み深い!

==Chorus Mysticus==　　＝神秘の合唱＝

Alles　Verga"ngliche　　202 つかのまのもの全ては

すべては つかのまの

Ist　nur　ein Gleichnis;　　ただのたとえにすぎない。

である ただ a　たとえ;　　(※文脈上は「映像」とも受け取れる)

Das Unzula"ngliche,　　手の届かないものは、

the 手の届かないもの,

Hier wird's Ereignis;　　ここ(天上界)で現実になる。

ここで ～なる 現象;

Das Unbeschreibliche,　　204 言い表わせないものは、

the 言い表わせないもの,　　(＝努力しつつ迷う人が救済されること)

Hier　ist's getan;　　ここで成し遂げられる。

ここで (完)　行なわれた;

Das Ewig-Weibliche　　永遠の女性的なものが、

the 永遠の女性らしさが

ﾃﾞﾊﾞﾝﾓｽﾝﾀﾞｼ、ﾗｯﾊﾟﾓｳﾙｻｲｶﾗ、ｿﾛｿﾛﾋﾅﾝｼﾖｳ

Zieht　uns　hinan.　　我々を上へ引き上げる。

引っ張る 我々を 上へ.

第5章　ミサの発音

ラテン語の発音と、ドイツふうラテン語(ジャーマンラテン)の発音

ミサはラテン語で行なわれますから、当然その発音は、ラテン語の発音に従います。ところがこの発音はドイツ人には難しいらしく、特別にドイツ語ふうの発音でやっても良いという許しが法王から出ています。これがジャーマンラテンです。

ふつう、ドイツ系の作曲家の作品(バッハ、モーツァルトなど)を演奏するときは、ジャーマンラテンでやることが多く、イタリア系の作曲家(ビバルディ、パレストリーナ、ヴェルディなど)を演奏するときは、本来のラテン語でやることが多いようです。

以下に、両者の違いや、その他発音上の注意を示します。

	ラテン語の発音	ドイツふう発音
【母音】	［共通］ 発音は１種類、英語のように単語によって変化しない。日本語とほぼ同じ発音。	
【長短】	長短で、発音は変わらない	短い母音：浅く発音、　長い母音：深く発音
【ａ】	ア、アー	アーは口を目いっぱい開く
【ｉ】	イ、イー	イーは口を左右に目いっぱい広げる
【ｕ】	ウ、ウー	ウーは口先を目いっぱいすぼめ、中を上下に開く
	（英語のようにユにならない ： lu=ル, ×リュ）	
【ｅ】	エ、エー	エーは口を左右に目いっぱい広げる（イに近い発音）
【ｏ】	オ、オー	オーは口先を目いっぱいすぼめ、中を上下に開く
【ｙ】	イ（【ｉ】と同じ）	ﾕｲ（ユの口をしてイと言う）
【母音の続くとき(二重母音)】		
【ei】	エイ(別々に発音)	エィ(つなげて発音)
【eu】	エウ(別々に発音)	オィ(なまる)
【ui】	ｳイ	ｳヴィ(下唇をかむ：uvi)
【ue】	ｳエ	ｳヴェ(uve)
【uo】	ｳオ	ｳヴォ(uvo)
	(母音の前のｕは子音扱い)	
【oe】	エ(eと同じ)	ｵエ(Ｏウムラウト＝オの口をしてエと言う)
【ae】	エ(eと同じ)	ｱエ(Ａウムラウト＝アの口をしてエと言う)
【子音】		
【ｈ】	発音しない(オサンナ)	発音する(ホザンナ)
【ｓ】	濁らない(ｻｼｽｾｿ)	単語の頭：本来は濁るが､濁らないことが多い(ｻﾝｸﾄｩｽ)
		前後とも母音のとき：濁る(ｲエーズ)
		前後どちらかが子音のとき：濁らない(ｸﾘｽﾃ)
【ｇ】	ジャ, ジ, ジュ, ジェ, ジョ	ガ, ギ, グ, ゲ, ゴ
【ci】	チ	ツィ
【ce】	チェ(cheの発音)	ツェ
【coe】	チェ(ceと同じ発音)	ﾂｫエ（ウムラウト）
【sci】	シ　(shiの発音)	ｽツィ
【xce】	シェ(sheの発音)	ｸｽツェ

【gn】　ニャ,ニ,ニュ,ニェ,ニョ　ｸﾞﾅ,ｸﾞﾆ,ｸﾞﾇ,ｸﾞﾈ,ｸﾞﾉ
【ch】　ｸﾊ,ｸﾋ,ｸﾌ,ｸﾍ,ｸﾎ　ヒャ,ヒ,ヒュ,ヒェ,ヒョ
【ph】　ﾌﾟハ,ﾌﾟヒ,ﾌﾟフ,ﾌﾟヘ,ﾌﾟホ　ファ,フィ,フ,フェ,フォ

双方共通の発音で、注意を要するもの
【ｊ】　ヤ,イ,ユ,イェ,ヨ　（×ジャ,ジ,ジュ,ジェ,ジョ）
【ｃ】　ci,ce以外は、ｋと同じ発音　(ca力,cuク,coコ)
【th】　ﾄｩハ,ﾄｩヒ,ﾄｩフ,ﾄｩヘ,ﾄｩホ（ｔとｈは別々に発音、英語のように下をかまない）
【ｘ】　ｸｻ,ｸｼ,ｸｽ,ｸｾ,ｸｿ　(英語のように濁らない)
【ｂ】　語尾や、ｓやｔの前では、プに近い発音
【ｌとｒ】　はっきり区別　（ｌ：下を上の歯の裏、ｒ：巻き舌）
【ti】　ふつうは　ティ
　後に母音がくるとき　ツィ（tio＝ツィオ、tia＝ツィア）
　但し、その前にｓやｘが来るとき　ティ（stia＝ｽティア）
【同じ子音の続くとき(ll,mm,ssなど)】
　ひとつひとつ分けて発音
※子音を発音するとき、母音が混ざらないよう注意！いっぺんで「日本語ふうラテン語」になってしまう。

ミサ　簡易発音表

西洋の言葉をカタカナで表わすのは、どだい無理があります。とはいえ、発音記号で書いても、発音を正確に再現できないのは同じことですし、実用上カタカナよりはるかにわかりにくいので、パっと見てわかりにくいことおびただしいので、ここでは「一応の参考」として、カタカナで基本的な発音を示します。なるべく早くカタカナから離れ、レコードや周囲の人の声をよく聞いて、「ラテン語ふう」な発音にしていきましょう。

【注意】
小さな文字は、子音などを表わします。
「ラリルレロ」はＬの音、「らりるれろ」はＲの音(巻き舌)を示します。
(　)内は、ドイツふうラテン語(ジャーマンラテン)を示します。

Kyrie　キりエ(ｸｭイりｴ)
Kyrie,　eleison.
キりエ(ｸｭイりｴ),　エレイソン(エレイゾン)
Christe,　eleison.
ｸりｽテ,　エレイソン(エレイゾン)
Kyrie,　eleison.
キりエ(ｸｭイりｴ),　エレイソン(エレイゾン)

Gloria　ｸﾞローりｱ
Gloria　in　excelsis　Deo.
ｸﾞローりｱ　イン　エｸシェルシｽ(エｸｽツェルシｽ)　デーオ.
Et　in　terra　pax　hominibus　bonae voluntatis.

ｴﾄｩ　ｲﾝ　ﾃﾙら　ﾊﾟｯｸｽ　ｵﾐﾆﾌﾞｽ(ﾎﾐﾆﾌﾞｽ)　ﾎﾞﾈ　ヴォルﾝターティｽ.
Laudamus　te, benedicimus　te,
ﾗｳﾀﾞﾑｽ　テ，ベネディチﾑｽ(ベネディツィﾑｽ)　テ，
adoramus　te, glorificamus te.
アドらﾑｽ　テ，ｸﾞロりフィカームｽ　テ.
Gratias　agimus　tibi
ｸﾞらーツィアｽ　アジﾑｽ(アギﾑｽ)　ティービ
propter　magnam　gloriam　tuam.
ﾌﾟろﾌﾟテル　マーニャﾑ(マｸﾞナﾑ)　ｸﾞローりアﾑ　トゥーアﾑ.
Domine　Deus,　Rex　coelestis,　Deus　Pater　omnipotens.
ドミネ　デーウｽ，ﾚｸｽ　チェレｽティｽ(ﾂｫエレｽティｽ)，デーウｽ　パーテル　ｵﾑニポテﾝｽ.
Domine　Fili　unigenite,　Jesu　Christe, altissime.
ドミネ　フィリ　ウニジェニテ(ウニゲニテ)，ｲエース(ｲエーズ)　ｸりｽテ，　アルティｽシメ.
Domine　Deus,　Agnus　Dei,　Filius　Patris.
ドミネ　デーウｽ，アニュｽ(アｸﾞヌｽ)　デーイ，フィリウｽ　ﾊﾟﾄｩりｽ.
Qui　tollis　peccata　mundi,　miserere　nobis.
ｸｲ(ｸヴィ)　トルりｽ　ペｸカータ　ﾑﾝディ，ミセれれ(ミゼれれ)　ノービｽ.
Qui　tollis　peccata　mundi,
ｸｲ(ｸヴィ)　トルりｽ　ペｸカータ　ﾑﾝディ，
suscipe　deprecationem　nostram.
スシペ(ｽｽツィペ)　デﾌﾟれカツィオーネﾑ　ノｽﾄｩらﾑ.
Qui　sedes　ad　dexteram　Patris,　miserere　nobis.
ｸｲ(ｸヴィ)セデｽ　アﾄﾞｩ　デｸｽテらﾑ　ﾊﾟﾄｩりｽ，ミセれれ(ミゼれれ)　ノービｽ.
Quonium　tu　solus　Sanctus,　tu　solus　Dominus,
ｸオーニアﾑ(ｸヴォーニアﾑ)　トゥ　ソルｽ　サﾝｸトゥｽ，トゥ　ソルｽ　ドミヌｽ，
tu　solus　Altissimus,　Jesu　Christe.
トゥ　ソルｽ　アルティｽシムｽ，ｲエース(ｲエーズ)　ｸりｽテ.
Cum　Sancto　spiritu　in　gloria　Dei　Patris.
クﾑ　サﾝｸト　ｽピりトゥ　ｲﾝ　ｸﾞローりア　デーイ　ﾊﾟﾄｩりｽ.
Amen.
アーメﾝ.

Credo　ｸれード
Credo　in　unum　Deum,
ｸれード　ｲﾝ　ウヌﾑ　デーウﾑ,
Patrem　omnipotentem,
ﾊﾟｰﾄｩれﾑ　ｵﾑニポテﾝテﾑ,
factorem　coeli　et　terrae,
ファｸトれﾑ　チェリ(ﾂｫェリ)　ｴﾄｩ　テルれ,
visibilium　omnium　et　invisibilium.
ヴィシビリウﾑ(ヴィジビリウﾑ)　ｵﾑニウﾑ　ｴﾄｩ　ｲﾝヴィシビリウﾑ(ｲﾝヴィジビリウﾑ).

Et in unum Dominum,
ｴﾄｩ ｲﾝ ｳﾇﾑ ﾄﾞﾐﾇﾑ,
Jesum Christum, Filium Dei unigenitum,
ｲｴｰｽﾑ(ｲｴｰｽﾞﾑ) ｸﾘｽﾄｩﾑ, ﾌｨﾘｳﾑ ﾃﾞｰｲ ｳﾆｼﾞｪﾆﾄｩﾑ(ｳﾆｹﾞﾆﾄｩﾑ),
et ex Patre natum ante omnia saecula.
ｴﾄｩ ｴｸｽ ﾊﾟｰﾄｩﾚ ﾅｰﾄｩﾑ ｱﾝﾃ ｵﾑﾆｱ ｾｸﾗ.
Deum de Deo, lumen de lumine, Deum verum de Deo vero,
ﾃﾞｰｳﾑ ﾃﾞ ﾃﾞｰｵ, ﾙｰﾒﾝ ﾃﾞ ﾙﾐﾈ, ﾃﾞｰｳﾑ ｳﾞｪｰﾙﾑ ﾃﾞ ﾃﾞｰｵ ｳﾞｪｰﾛ,
genitum, non factum, consubstantialem Patri,
ｼﾞｪﾆﾄｩﾑ(ｹﾞﾆﾄｩﾑ), ﾉﾝ ﾌｧｸﾄｩﾑ, ｺﾝｽﾌﾟｽﾀﾝﾂｨｱｰﾚﾑ ﾊﾟｰﾄｩﾘ,
per quem omnia facta sunt.
ﾍﾟﾙ ｸｴﾑ(ｸｳﾞｪﾑ) ｵﾑﾆｱ ﾌｧｸﾀ ｽﾝﾄｩ.
Qui propter nos homines et propter nostram salutem
ｸｲ(ｸｳﾞｨ) ﾌﾟﾛﾌﾟﾃﾙ ﾉｽ ｵﾐﾈｽ(ﾎﾐﾈｽ) ｴﾄｩ ﾌﾟﾛﾌﾟﾃﾙ ﾉｽﾄｩﾗﾑ ｻﾙｰﾃﾑ
descendit de coelis.
ﾃﾞｼｪﾝﾃﾞｨｯﾄｩ(ﾃﾞｽﾂｪﾝﾃﾞｨｯﾄｩ) ﾃﾞ ﾁｪｰﾘｽ(ﾂｫｴｰﾘｽ).
Et incarnatus est de Spiritu Sancto ex Maria Virgine,
ｴﾄｩ ｲﾝｶﾙﾅｰﾄｩｽ ｴｽﾄｩ ﾃﾞ ｽﾋﾟﾘﾄｩ ｻﾝｸﾄ ｴｸｽ ﾏﾘｱ ｳﾞｨﾙｼﾞﾈ(ｳﾞｨﾙｷﾞﾈ),
et homo factus est.
ｴﾄｩ ｵﾓ(ﾎﾓ) ﾌｧｸﾄｩｽ ｴｽﾄｩ.
Crucifixus etiam pro nobis
ｸﾙｼﾁﾌｨｸｽｽ(ｸﾙﾂｨﾌｨｸｽｽ) ｴﾂｨｱﾑ ﾌﾟﾛ ﾉｰﾋﾞｽ
sub Pontio Pilato,
ｽﾌﾟ ﾎﾟﾝﾂｨｵ ﾋﾟﾗﾄ,
passus et sepultus est.
ﾊﾟｽｽｽ ｴﾄｩ ｾﾌﾟﾙﾄｩｽ ｴｽﾄｩ.
Et resurrexit tertia die, secundum Scripturas.
ｴﾄｩ ﾚｽﾙﾚｸｼｯﾄｩ(ﾚｽﾞﾙﾚｸｼｯﾄｩ) ﾃﾙﾂｨｱ ﾃﾞｨｰｴ ｾｸﾝﾄﾞｩﾑ ｽｸﾘﾌﾟﾄｩｰﾗｽ.
Et ascendit in coelum,
ｴﾄｩ ｱｼｪﾝﾃﾞｨｯﾄｩ(ｱｽﾂｪﾝﾃﾞｨｯﾄｩ) ｲﾝ ﾁｪｰﾙﾑ(ﾂｫｴｰﾙﾑ),
sedet ad dexteram Dei Patris,
ｾﾃﾞｯﾄｩ ｱﾄﾞｩ ﾃﾞｸｽﾃﾗﾑ ﾃﾞｰｲ ﾊﾟｰﾄｩﾘｽ,
et iterum venturus est cum gloria,
ｴﾄｩ ｲﾃﾙﾑ ｳﾞｪﾝﾄｩｰﾙｽ ｴｽﾄｩ ｸﾑ ｸﾞﾛｰﾘｱ,
judicare vivos et mortuos,
ﾕﾃﾞｨｶﾚ ｳﾞｨｰｳﾞｫｽ ｴﾄｩ ﾓﾙﾄｩｵｽ,
cujus regni non erit finis.
ｸｰﾕｽ ﾚｸﾞﾆ ﾉﾝ ｴｰﾘｯﾄｩ ﾌｨｰﾆｽ.
Et in Spiritum Sanctum, Dominum et vivificantem,
ｴﾄｩ ｲﾝ ｽﾋﾟﾘﾄｩﾑ ｻﾝｸﾄｩﾑ, ﾄﾞﾐﾇﾑ ｴﾄｩ ｳﾞｨｳﾞｨﾌｨｶﾝﾃﾑ.
qui ex Patre Filoque procedit.

ｸｲ(ｸヴィ)　ｴｸｽ　ﾊﾟｰﾄｩれ　ﾌｨﾛｸｪ　ﾌﾟろチェーディットゥ(ﾌﾟろツェーディットゥ).
Qui　cum　Patre　et　Filio　simul
ｸｲ(ｸヴィ)　クム　ﾊﾟｰﾄｩれ　ｴﾄｩ　ﾌｨﾘｵ　シムル
adoratur　et　conglorificatur:
アドらートゥル　ｴﾄｩ　ｺﾝｸﾞロりフィカートゥル:
qui　locutus　est　per　Prophetas.
ｸｲ(ｸヴィ)　ロクトゥス　ｴｽﾄｩ　ペル　ﾌﾟろﾌﾟへータス(ﾌﾟろフェータス).
Et　unam,　sanctam,　catholicam　et　apostolicam　Ecclesiam.
ｴﾄｩ　ウーナム,　ｻﾝｸタム,　カトゥホーリカム　ｴﾄｩ　アポストリカム　ｴｸｸレーシアム(ｴｸｸレージアム).
Confiteor　unum　baptisma　in　remissionem　peccatorum.
ｺﾝフィテオル　ウーヌム　バﾌﾟティスマ　ｲﾝ　れミスシオーネム　ペｸカトーるム.
Et　exspecto　resurrectionem　mortuorum,
ｴﾄｩ　ｴｸｽペクト　レスルれｸツィオーネム(レズルれｸツィオーネム)　モルトゥオールるム,
et　vitam　ventri　saeculi.
ｴﾄｩ　ヴィータム　ヴェﾝﾄｩり　セクリ.
Amen.
アーメﾝ.

Sanctus　ｻﾝｸトゥス
Sanctus,　Sanctus,　Sanctus　Dominus　Deus　Sabaoth.
ｻﾝｸトゥス,　ｻﾝｸトゥス,　ｻﾝｸトゥス　ドミヌス　デーウス　サバオﾄｩ
Pleni　sunt　coeli　et　terra　gloria　tua. (ejus.)
ﾌﾟレーニ　スﾝﾄｩ　チェーリ(ﾂｫエーリ)　ｴﾄｩ　テルら　ｸﾞローりア　トゥーア.(エーユス.)
Hosanna　in　excelsis.
オサﾝナ(ホザﾝナ)　ｲﾝ　ｴｸシェルシス(ｴｸスツェルシス).

Benedictus　ベネディクトゥス
Benedictus,　qui　venit　in　nomine　Domini.
ベネディクトゥス,　ｸｲ(ｸヴィ)　ヴェーニットゥ　ｲﾝ　ノミネ　ドミニ.
Hosanna　in　excelsis.
オサﾝナ(ホザﾝナ)　ｲﾝ　ｴｸシェルシス(ｴｸスツェルシス).

Agnus Dei　アニュス　デーイ
Agnus　Dei,　qui　tollis　peccata　mundi,
アニュス(アｸﾞヌス)　デーイ,　ｸｲ(ｸヴィ)　トルリス　ペｸカータ　ムンディ,
miserere　nobis.
ミセれれ(ミゼれれ)　ノービス.
Dona　nobis　pacem.
ドナ　ノービス　パーチェム(パーツェム).

第6章　ミサの解説　　（一部内容が第1章と重複します。）

1990.3月　伊藤　啓

ミサのはなし

世の中にはたくさんのミサ曲があり、毎週のように演奏されています。しかし、これらの曲は決していま私たちが聴く（あるいは歌う）ように、舞台の上で通して演奏されるために書かれたわけではありません。

ミサ曲は、教会で行なわれるミサのために作られ、演奏されてきたのです。

・キリスト教の簡単な歴史

キリスト教は、律法至上主義に陥ったユダヤ教への改革運動から生まれました。大事なのは律法に書かれた精神であって、個々の規定はどうでもよく、人を愛することが一番大切であると説いたのです。

保守派の抵抗にあって改革者イエス・キリストは処刑され、弟子がその思想を広めました。ローマ帝国の支配下にあった地中海東部に布教が進むにつれ、帝国は危険思想として弾圧し、多くの信者が処刑されました。しかし4世紀前半(313年)には、ついにローマ皇帝コンスタンチヌスも信者になってしまい、キリスト教は帝国の国教となります(392年)。この後200年ほどの間、教義について話し合う公会議が何度も開かれ、今のキリスト教の骨格が定まりました。

キリスト教の教典は、旧約聖書と新約聖書です。旧約聖書はユダヤ教のものと同じで、ヘブライ語で書かれています。ユダヤの歴史と、救い主や救済に関する預言者の文書、お祈りの文句などが納められています。新約聖書は、イエスの死後数十年の間にまとめられ、当時の地中海東部の公用語であったギリシャ語で書かれています。イエスの伝記と人々に語った教え、弟子たちの布教の様子、有力な弟子が各地の教会に送った手紙などが納められています。

キリスト教がローマ帝国に広まるにつれ、聖書もローマ帝国の言葉であるラテン語に訳され、４世紀末にはヒエロニムスらによって決定版の訳が作られました。これは現在でも使われています。

教会組織はローマとコンスタンチノープルに活動の中心を置いていましたが、この２つは教義や政治・習慣上の問題でだんだん対立が深くなり、11世紀には、東のギリシャ正教と西のローマ・カトリックに分かれてしまいました。さらに16世紀、ルターやカルバンらによって、カトリックの硬直化への批判からプロテスタント運動が起こり、数多くの新しい宗派が生まれました。プロテスタントは、カトリックが聖書以外に、公会議で定めた典礼など多くのものを奉じていることを批判し、聖書のみに頼るのを特徴としています。また、カトリックが聖職者の役割を重視するのに対し、プロテスタントは一般の信者の役割を重視しました。すでに庶民には理解できなくなっていたラテン語の聖書を、10世紀ぶりに皆の使っている言葉（ドイツ語）に訳したのは、ルターでした。

16世紀以後の大航海時代にともない、カトリックもプロテスタントも競って布教につとめ、ヨーロッパから世界中にキリスト教が広まって行ったのは、ご存知の通りです。

さて、カトリックにはたくさんのグループや修道会がありますが、すべて総本山であるローマの法王の元に統括されていて、活動方針や教義の解釈、ミサをはじめとする礼拝のやり方などが統一されています。それに対してプロテスタントには統一組織はなく、各派が自分の責任でいろいろなことを決めています。各宗派の間には、「カトリックでない」という以上の共通点はありません。

カトリックとプロテスタントは、元来は仲が悪く、何度も戦争や虐殺事件なども起こしていますが、最近は「同じキリスト教なのだから」ということで、対立が融和しています。日本でも、聖書の日本語訳を共同で行なうなどの活動が進んでいます。

とはいえ、カトリックとプロテスタントでは細かいことですが、

カトリック	：	神父	ミサ	聖歌	「しずけき真夜中」
プロテスタント	：	牧師	聖餐式	賛美歌	「きよしこの夜」

といった用語やお祈りの文句や歌詞に差があったり、聖母マリアの像が礼拝堂に置いてあったりなかったり（カトリックはキリストの母マリアをも特別の人間として崇拝しますが、プロテスタントは、聖書にマリアを崇拝する記述がないことから、マリアを尊敬はしても崇拝はしません。）、ミサの雰囲気がだいぶ違ったり、いろいろ差のあるのは事実です。

・ラテン語のはなし

キリスト教はローマ帝国とともに発展したので、使う言葉はローマの国語であるラテン語です。聖書も、原典であるヘブライ語やギリシャ語のものは、翻訳のときや学者の研究以外には使われず、ラテン語の聖書がずっと使われてきました。

ローマ帝国が滅んで、ラテン語を使う国がなくなってからも、教会ではラテン語が使われ続け、神学から発展した学問の世界でも、ラテン語が共通の言葉として通用してきました。19世紀まで学術論文はラテン語が主でしたし、学名は今でもラテン語でつけられています。カトリック教会の公用語は現在もラテン語で、法王からの通達はラテン語で出されています。

イタリア語はラテン語の直系の子孫といえます。また英語、ドイツ語、フランス語などは、ラテン語の影響を非常に強く受けていて、ラテン語から作られた単語が、半分以上を占めるといわれています。ちょうど、日本語と漢語の関係にあるわけです。それもあって、ヨーロッパの高校では、日本で漢文を学ぶのと同様に、ラテン語を学習しているそうです。

・ミサってなに？

ミサはキリスト教の礼拝です。キリストが捕らえられる直前、最後の晩餐で、パンとぶどう酒を皆に与えて、「これは世の罪を負って十字架につけられ、神にあがないをするための私の血と肉である。これを飲み、食べることで、私を記念しなさい」と言いました。この最後の晩餐を再現し、神への信仰を確認するのがミサです。（教祖を食べる恐怖の儀式と言えないこともありませんが、、、。）

・ミサの内容

ミサは大きな教会では、毎日３時間おきに行なうことになっています（夜の分は朝に何度もやる）が、ふつうの人が出るのは週１回、日曜日の午前中です。毎日曜（主なる神の日ということで、主日といいます）は、「〇〇聖人の記念日」とか復活祭（イエスの復活した日）、聖霊降臨祭（マリアが聖霊によって妊娠した日）、イエスの誕生日と言った記念日に決まっており、その日によってミサの目的が決まっています。また、死者を弔うための「死者のためのミサ」も、随時開かれます。

ミサでは聖書を朗読し、司祭の説教を聞き、信仰を確認し、パンを食べ、ぶどう酒を飲みます（聖体を拝領すると言います）。今のミサでは、パンと言っても「ホスチア」といって、塩味だけでふくらし粉の入っていないもの（ほとんど塩せんべい）を食べますので、食事がわりにはなりません。カトリック教会ではぶどう酒はみんなで飲まず、司祭だけが「皆を代表して」飲み、信者はうらやましそうに（？）見ています。

また、ミサに参加するのは信者でなくても自由ですが、パンを食べられるのは信者だけです。（大昔は信者以外は、聖体拝領の前に外に出されたそうな。）

・ミサの言葉

カトリックでは、ミサで唱えられる全ての言葉が、司祭と会衆の対話（かけあい）も含めて、台本として決められています。これは、１年を通じて毎回共通の部分（通常文）と、ミサをする日や目的に合わせて変わる部分（固有文）に分かれています。各教会で文面を自由に決められるのは、説教と共同祈願くらいのものです。

教会の公用語はラテン語ですから、ミサもラテン語で行なわれてきました。現在のカトリック教会のミサの式次第は、1569年のトレントの公会議で統一されたものです。日本などでも、正式なミサはラテン語で行なわれてきたのです。（これはプロテスタントとは大きな違いです。）

現在のように、ミサを各国の言葉で行なって良いようになったのは、1962～65年の第２バチカン公会議以後のことです。現在ラテン語によるミサは、日本ではほとんど行なわれていません。

ミサ曲は、この２つの公会議の間に作られたものばかりですから、言葉はラテン語です。ただし冒頭の「キリエ・エレイソン」だけは、初期キリスト教時代のギリシャ語のお祈りの言葉が、そのまま使われています。

・ミサ曲

最も簡便なミサは、音楽を使わずにすべてお経のように唱えてしまう方法です。これを「読誦ミサ」といい、聖職者が日課として行なっているミサはこの形式です。

もう少し余裕のあるときは、中世教会の賛美歌であるグレゴリオ聖歌を用います。通常文はもちろんのこと、１年間すべてのミサの固有文について、グレゴリオ聖歌が用意されています。ミサ以外の多くの祈祷も、準備されています。カトリックでは現在でも、グレゴリオ聖歌は「最も重要なもの」とされ、日々用いられ、校訂も続けられています。

最近のミサでは、グレゴリオ聖歌の替わりに、各国語で作られた聖歌を利用することが多くなっています。近所の教会で毎日曜日にやっているのは、この形式です。

さて、グレゴリオ聖歌は単旋律（ユニゾン）の音楽ですが、12世紀頃から複旋律（合唱）の音楽が作られるようになりました。毎回歌われる通常文のうち、

憐れみの賛歌（キリエ）
栄光の賛歌（グローリア）
信仰宣言（クレド）
感謝の賛歌（サンクトゥス、ベネディクトゥス）
平和の賛歌（アニュス・デイ）

の５つは、重要な位置を占めるので、この５ケ所に複旋律（合唱）の音楽が作曲されるようになりました。これがいわゆる「ミサ曲」で、14世紀末、ギョーム・ド・マショーらの頃が最初とされています。

昔は演奏会というものはなく、作曲家の仕事場といえば宮廷か教会でしたから、ほとんどの作曲家が教会音楽を書いています。そしてカトリックの地域では、必ずミサ曲が書かれています。ルネサンス、バロック、古典、ロマン、新古典と音楽の流れの変わるにつれて、そのときどきの形式で、まったく違った雰囲気のミサ曲が、作られ続けて行きました。

作曲家が違っても、ミサと名のつくものは、歌詞は基本的に同じです。１曲30分弱のものから２時間を越えるものまでいろいろありますが、短い曲では２つの言葉を違うパートが同時に歌ってしまったりして時間を節約し、長い曲では同じ言葉を何度も繰り返して時間を稼いでいます。（１曲言葉を覚えれば、他の曲でも覚え直す必要はありません！）

これらのミサ曲を使ってミサをする場合、作曲されているのは５つの通常文だけですから、ほかの短い通常文や、固有文の部分には、グレゴリオ聖歌が用いられました。また、モーツァルトのいたザルツブルグの教会などでは、聖書の朗読の前に、景気付けの器楽曲が演奏されたといいます。いずれにせよ、作曲されたミサ曲だけでミサが行なわれることはありません。

ミサの中でも、高位の聖職者が司式し、侍者や聖歌隊を多く従えたものを、ミサ・ソレムニス（盛儀ミサ、荘厳ミサ）といいます。（ベートーベンの作品だけが荘厳ミサではありません。）

また、全体をコンパクトに作曲し、規模も小さくしたミサ曲をミサ・ブレヴィス（短ミサ）といいます（パレス

トリーナや、モーツァルトなど）。ルター派の教会で歌われた、キリエとグローリアだけの曲を、ミサ・ブレヴィスということもあります（バッハなど）。

プロテスタント教会では、カトリックのように厳密に決まった礼拝の台本がないので、ミサ曲は作られません。上に書いたように、ルター派ではキリエとグローリアだけが作曲されることがありました。グレゴリオ聖歌の替わりに、ドイツ土俗の曲からつくられた賛美歌（コラール）が歌われました。また、その日のミサの内容に合わせて、聖書の引用や自由な詩を組み合わせたカンタータが、ミサ曲の代わりをつとめました。同様に英国国教会では、アンセムという英語版カンタータが、礼拝に用いられました。

カトリックでもプロテスタントでも、一時は音楽的美しさを追求するあまり、ほとんどの部分を聖歌隊が歌い、会衆はただ聴いているだけという状態に近くなっていました。しかしそれではミサが遊離してしまうというので、近年は全てみんなで歌う（唱える）ことがふつうになっています。そのためもあって現在では、オーケストラと合唱を備えたミサ曲を使ってミサを行なうことは、ほとんどなくなっています。

・ミサを体験するには

ＣＤとしては、ローマ法王がバチカンのサン・ピエトロ教会で行なったミサで、カラヤン・ウィーンフィルがモーツァルトの「戴冠ミサ」を演奏したライブ録音がでています。すべてラテン語ですが、聖書朗読や共同祈願では英語、日本語、アラビア語など各国語が飛び交って、さすがバチカンという感じです。聖体拝領唱では、モーツァルトのアヴェ・ヴェルム・コルプスが演奏されています。ＣＤ１枚に納めるため、説教などがはしょられていますが、聞いてみて損はないでしょう。

戴冠式ミサ曲　カラヤン　ソロ：バトル他　　Po-グラモフォン　F35G-20025　¥3286

・実際にミサに行くには

日曜の朝10時ごろ、近所の教会にふらっと入ってみれば、いつでも入れてくれます。信者でなくても、知り合いがいなくても、全くかまいません。

注意することといえば、カトリック教会の椅子の足元にある台は、ひざまづくときの台なので土足を乗せないことと（東京カテドラルの音楽会では、みんな足のせにしてしまっていますが）、途中で献金が回ってくるので数百円程度用意しておくこと、聖体拝領の時に、便乗してパンをもらわないこと、ぐらいです。どこでも、大体１時間ちょっとで終わります。

カトリック教会のミサは、神父と信者とのかけあいの言葉がいろいろ決まっていたり、鐘の音で一斉にひざまづいて祈ったり、いきなり前後左右の人におじぎしたりして、少々面食らう（不気味と言えなくもない）ことの多いものがありますが、回りに合わせていれば何とかなります。

プロテスタントの場合、ミサでなく聖餐式といいます。これには決まった式次第はなく、雰囲気もカトリックよりは馴染みやすいかも知れません。牧師の指示通りにしていれば大丈夫です。

お茶の水のニコライ堂では、ギリシャ正教のミサをやっています。内容はほぼ同じですが、雰囲気はまた違ったものがあるということです。

ミサがすんでから、初めて来た人は自己紹介などさせられることがありますが、どこかの宗教団体のようにしつこくつきまとわれることはないので、恐がることはありません。

何となくいきなり行くのも不安な人は、クリスマスイブに大きな教会（四谷のイグナチオ教会や、目白の東京カテドラルなど）に行ってみましょう。始めて来る人が多いので、それ用のパンフレットも用意されていますし、ミサの途中で司祭が初心者向けに案内をしてくれるので、安心です。

もちろんミサは信者たちの信仰の場ですから、ただ興味本意だけで行くのはお勧めできません。一応は信仰に対する尊敬を持って参加しましょう。　　（私は信者ではありませんが、、、）

カトリックのミサの式次第

1962～65の第２回バチカン公会議では、400年ぶりにミサの式次第が改正されました。各国語でのミサを認めるほかに、旧約聖書の朗読や古い典礼聖歌を復活するなど、ミサの原点に還る方向で変更が行なわれています。また、グレゴリオ聖歌ばかりでなく、聖歌から同じ内容の曲を選んで利用することも、広く行なわれます。以下は、この新しい式次第を元に、ミサ曲の書かれた当時の状態も記しています。ミサの全体像をつかむときや、教会に行くときの参考にでもして下さい。

注　通常文：１年を通じて、毎回共通な（せりふの変わらない）部分
　　固有文：ミサの日や、目的に応じて、変化する部分
　　司祭　：司祭の唱える（歌う）部分
　　会衆　：信者を初めとする参加者、あるいは聖歌隊が唱える（歌う）部分
　　対話　：司祭と会衆がかけあいで唱える部分

【開祭】ミサの始まり

１：Introitus　入祭唱　（固有文・会衆）
司祭や侍者の入場にともなう歌。グレゴリオ聖歌で歌われるのが基本です。

２：Salutatio　入祭の挨拶　（通常文・対話）
司祭と会衆が言い交わします。

３：Confiteor　改心の祈り　（通常文・会衆）
沈黙して各自反省したのち、みんなで唱えます。

４：Kyrie　あわれみの賛歌　（通常文・会衆）
三位一体を象徴して、神と、キリストと、聖霊に、それぞれ３回づつ憐れみを乞います。この部分のみ、ラテン語でなくギリシャ語です。

５：Gloria　栄光の賛歌　（通常文・会衆）
まず神とキリストをたたえます。次に憐れみを乞います。最後に、唯一の主であるキリストと、神と、聖霊が一体であることを確認します。
クリスマス、復活祭の前と、死者のためのミサでは、省かれます。

６：Collecta　集会祈願　（固有文・司祭）
その日のミサの目的を唱えます。

【ことばの典礼】聖書の朗読と説教

７：Lectio V.T.　旧約聖書朗読　（固有文・朗読者）
4～５世紀以来、長らく行なわれず、最近復活しました。従ってバロック・古典時代にはありませんでした。旧約聖書の朗読をします。朗読箇所は、その日に朗読される福音書との関連で決められます。

８：Psalmus responsorius　答唱詩編　（固有文・会衆）
従来のGraduale（昇階唱）に相当するもので、

９：Lectio libri apostoli　書簡の朗読　（固有文・朗読者）
新約聖書の後半にある、イエスの弟子が各地の教会に宛てた手紙を朗読します。

10：Alleluia または Tractus　アレルヤ唱または詠唱（固有文・会衆）
次に読まれる福音書を歓迎して、歓喜の歌（アレルヤ）を唱えます。復活祭前や死者のための

ミサでは、自粛して悲しみの歌（詠唱）を唱えます。

11： Sequentia　　続唱　　（固有文・会衆）

復活祭、聖霊降臨祭、死者のためのミサなどで唱えられます。

12： Salutatio　　挨拶　　（通常文・対話）

挨拶を歌い交わして、福音書への心構えを新たにします。

13： Lectio evangelii　　福音書の朗読　　（固有文・助祭）

新約聖書の前半にある、イエスの伝記を朗読します。朗読箇所は、１年間でイエスの行跡を一巡するように選ばれます。最後に、会衆がイエスを賛美します。

14： Homilia　　説教　　（固有文・司祭）

朗読の内容にちなんで、教えの解説があります。

15： Credo　　信仰宣言　　（通常文・会衆）

キリスト教信者の信ずるべき内容が示されています。

神の存在、

キリストの存在、キリストがこの世に下って人になり、十字架につけられ、復活したこと、

聖霊の存在、教会への信頼と洗礼の意義、死者の復活

を信じなくてはなりません。この部分の内容はニケーアの公会議で決められたので、「ニケーア信経」ともいいます。死者のためのミサでは省かれます。

16： Oratio communis　　共同祈願　　（固有文・一同）

「世界人類に平和を」から「入院している〇〇さんが早く良くなりますように」まで、信者たちのいろいろな祈りを捧げます。信者の代表何人かが願いを唱え、皆で神が聞き入れてくれるよう祈ります。

【感謝の典礼】聖体の準備

17： Offertorium　　奉納唱　　（固有文・会衆）

パンとぶどう酒を聖壇に捧げます。教会への献金が行なわれます。

18： Secreta　　密誦　　（固有文・司祭）

奉納を祈願する祈りで、従来は黙読されました。現在は歌われます。

19： Salutatio　　序誦前の挨拶　　（通常文・対話）

挨拶を歌い交わします。

20： Praefatio　　叙誦　　（固有文・司祭）

神とその民の前で、救いの業を述べる祈りです。

21： Sanctus　　感謝の賛歌　　（通常文・会衆）

神の神聖さに感動する歌。従来は、この歌を歌う間に、ミサ典文が司祭によって黙読され、聖変化が行なわれました。

22： Benedictus　　感謝の賛歌（続き）　　（通常文・会衆）

パンとぶどう酒の形をとってやって来る主キリスト（あるいは、主の名によってやって来るパンとぶどう酒）を歓迎する歌。

23：Canon missae　　ミサ典文　　（聖別祈祷、奉納文・司祭）

最後の晩餐でのキリストの言葉を元にし、受難・死・復活を記念します。歌わずに唱えられ、パンとぶどう酒を聖体に変える（聖変化）おまじないを含みます。

【交わりの儀】聖体を拝領

24： Pater noster　　主の祈り　　（通常文・会衆）

キリストが弟子に教えた、神への祈りです。従来は司祭だけが唱えました。現在はみんなで唱えます。参考までに文句を書いておきます。

カトリック	プロテスタント
天にます我らの父よ、	天にます我らの父よ、
願わくば御名（みな）のとうとまれんことを、	願わくば御名（みな）をあがめさせたまえ、
御国（みくに）の来たらんことを。	御国（みくに）を来たらせたまえ。
御旨（みむね）の天に行なわれるごとく、	御心（みこころ）の天になるごとく、
地にも行なわれんことを。	地にもなさせたまえ。
我らの日用の糧（かて）を	我らの日用の糧（かて）を、
今日（こんにち）我らに与えたまえ。	今日（きょう）も与えたまえ。
我らが人を許すごとく、	我らに罪を犯すものを我らが許すごとく、
我らの罪を許したまえ。	我らの罪をも許したまえ。
我らを試みにひきたまわざれ、	我らを試みにあわせず、
我らを悪より救いたまえ。	悪より救い出し（いだし）たまえ。
アーメン	国と力と栄えとは、
	限りなく汝のものなればなり
	アーメン

25： Embolismus　　副文　　（通常文・司祭）

主の祈りの補足です。

26： Pax　　平和の挨拶　　（通常文・対話）

キリストの平和がいつもあるように、互いに前後左右の人と挨拶をします。

27： Agnus Dei　　平和の賛歌　　（通常文・会衆）

聖体となったパンを「神の小羊」と呼び、人類のためにいけにえとなったキリストに、憐れみを乞います。この間に、司祭は聖体を分ける準備をします。

28： Communio　　聖体拝領唱　　（固有文・会衆）

司祭がぶどう酒を飲み、信者は並んで司祭の前に進み出て、パン（ホスチア）を拝領します。信者が口をあけ、司祭に食べさせてもらうという感じです。聖体拝領唱は、元来は信者が聖体を拝領するあいだ歌われましたが、最近はみんなの拝領がすんでから歌われます。

30： Oratio　　拝領祈願　　（固有文・司祭）

【閉祭】

29： Ite Missa Est　　閉祭の挨拶　　（通常文・司祭）

「行け、これにて去れ」という意味。この言葉から「ミサ」という名前が出ています。ただ終わったから帰るというのではなく、教会からおもてに、教えを広めていくというニュアンスが込められています。

第7章　レクイエムの解説　　（一部内容が第2章と重複します。）

1990.9月　伊藤　啓

レクイエムとは

レクイエムは、カトリック・キリスト教の礼拝のための音楽であり、西洋音楽の伝統の中で長い間重要な地位を保ち続けてきました。カトリック圏に属する主要な作曲家は、ルネサンス時代から現代まで、ほとんどがレクイエムを作曲しています。５年前、キャッツやスターライトエクスプレスで有名なミュージカル作家のアンドリュー・ロイド・ウェッバーが発表し、クラシック音楽で初めてビルボードのポップスアルバムチャートでトップになったのも、レクイエムでした。

この文書では、礼拝用の音楽としてのレクイエムの内容とその歴史について、簡単に解説します。

ミサとしてのレクイエム

レクイエムはミサ曲の一種です。ミサ曲とは、ミサと呼ばれるカトリック・キリスト教の礼拝のために書かれる音楽です。

ミサは聖職者によって、毎日８回づつおこなわれますが、もっとも大切なミサは毎日曜日(主の日という意味で「主日」という)に行なわれるミサで、これはクリスマス、復活祭、三位一体、、、などのようにその時ごとに礼拝の目的が決められています。一般の信者は、週１回このミサに出席するのがふつうです。

ミサで唱えられる文句は、二つに分けられ、

毎回共通の部分　　：　通常文

ミサによって異なる部分　：　固有文

と呼ばれています。それぞれについて会衆が唱える部分、司祭が唱える部分が、ちょうど芝居の台本のように厳密に定められています。各教会で好きに変えることの出来るのは、説教や共同祈願の内容ぐらいです。

レクイエムと呼ばれるミサは、「死者のためのミサ」の別名です。このミサは10世紀末に現われたもので、毎年11月２日の「死者の日」(キリスト教のお盆)のほか、信者の葬式や法事の際に行なわれます。このミサがレクイエム(「平安を」)と呼ばれるのは、死者のためのミサがこの言葉で始まり、また式のあいだ頻繁に唱えられる言葉だからです。

※「平安」という単語はrequiesですが、目的格のときは語尾が変わってrequiemになります。

なお、ミサはカトリック教会の礼拝儀式であり、プロテスタント教会の礼拝は形が異なります。ですから、プロテスタント教会では通常レクイエムは演奏されません。当然ながら、プロテスタントの作曲家はほとんどレクイエムを作曲していません(例外もありますが)。

ミサの歴史、内容、式次第については、前に作成・配布した「ミサの解説」をご覧ください。

レクイエムの目的

キリスト教の死生観は、仏教などとはかなり異なります。キリスト教では、死んだ人は実はただ眠っているだけであり、世界の最後の日にラッパによってたたき起こされ、復活をするのです。ただし、復活した信者はそのまま永遠の生命を得られるわけではなく、ここで「最後の審判」を受けなくてはなりません。信者それぞれについて生前の行ないをすべて記録した「生命の書」というのが作られていて、ラッパの音とともに下ってきた神が、これをもとに審判を下し、選ばれた人だけが永遠の生命を得ることができるのです。この審判はとてもきびしく、一切の言い逃れは効かないとされています。この審判に落ちた人は、救済のない本当の死である「第二の死」を迎えることになります。

「死後の復活」という考えはキリスト教の教えの中でも重要な部分であり、信者はミサの「信仰宣言(クレード)」の時に、毎週繰り返し「復活を信じます」と宣言しなくてはなりません。また、ヘンデルのメサイア第３部のバス

とトランペットのアリアや、ブラームスのドイツレクイエムの第６曲では、この教えを説いた聖書の言葉が印象的に取り上げられています。

一方、審判が死んですぐではなく、世界の最後の日に全員まとめて行なわれるというのは、重要なポイントです。キリスト教では、死者のためのミサをする時点ですでに死んでいる人もまだ生きている人も、審判を受けるのはみんな同時なのです。ですから死者のためのミサであっても、死者が永遠の生命を得られるように、最後の審判で救われるように祈るだけでなく、それと同時に、あるいはそれ以上に、ミサに参加する自分自身も救われるように祈る必要があるわけです。

ですから死者のためのミサは仏教の葬式や法事と異なり、特定個人のための礼拝ではありません。"Dona eis requiem."はあくまで「彼ら(eis)に安息を与えたまえ」であって、「彼(ei)に安息を与えたまえ」ではないのです。救済を願う対象は死者一般であって、特定の故人ではありません。死者を表わす言葉はすべて複数形で現われます。

レクイエムの中には例外的に「彼らを(eis)」でなく、通常のミサ文で使われる「私たちを(nobis)」でもなく、ずばり「私を(me)救いたまえ」と連呼する部分があります。セクエンツィア(続唱、ディエス・イレ)とアブソルーチオ(赦祷唱、リベラ・メ)です。この２つは最後の審判の恐ろしさを特に強調した部分ですが、対訳中の説明で触れるように、ともに本来のミサとは少し違う由来を持っています。「彼らを救いたまえ」などと建て前を言っているミサの他の部分に対し、これらは「本当は私が助かりたいんだ」という「本音」が素直に出てしまった部分と言えましょう(ほんとかな？)。

レクイエムの歌詞

死者のためのミサがミサの一種であるのと同様に、音楽としてのレクイエムはミサ曲の一種です。いわゆる「ミサ曲」は、通常文のうち特に重要な５ケ所

キリエ	憐れみの賛歌
グローリア	栄光の賛歌
クレード	信仰宣言
サンクトゥス／ベネディクトゥス	感謝の賛歌
アニュス・デイ	平和の賛歌

に曲をつけたものです。ミサ曲は目的を問わずどのミサでも使えるように作曲されていますので、通常文のみしか作曲されません。固有文の部分は、歌にせず唱えたり、グレゴリオ聖歌を用いたりします。一方レクイエムは用途が死者のためのミサに限られていますので、固有文も含めて作曲されます。ただし作曲されるのは、会衆(ミサに参加する一般信者)が唱える部分だけです。司祭が唱える部分には作曲されません。

またミサ曲に作曲される通常文のうちグローリアとクレードは、死者のためのミサでは唱えないことになっているので、レクイエムには作曲されません。

整理すると

レクイエム＝通常文５つ－(グローリアとクレード)＋死者のためのミサ固有文　　です。

通常文の部分は、作曲者を問わず必ず作曲されますが、固有文は時代によって、作曲者によって、一部が作曲されないこともあります。また作曲者によっては、本来ミサには属さないミサ終了後の儀式(赦祷式、出棺など)のための言葉にも作曲することがあります。

特に古典派以後の作曲者の場合、長い部分をいくつかに分けて作曲したり、異なる部分をつなげて１曲にしたりしていますので、ここで述べるミサの各部分と曲の番号や題名は、必ずしも一致しません。以下に、ミサ全体の式次第のうち、レクエイムとして作曲される部分を示します。●のついたところが、作曲される部分です。

【開祭】ミサの始まり

●１： Introitus(入祭唱)　(固有文・会衆)　司祭や侍者の入場にともなう歌。
２： Salutatio(入祭の挨拶)　(通常文・対話)　司祭と会衆が言い交わす。
３： Confiteor(改心の祈り)　(通常文・会衆)　沈黙して各自反省したのち、皆で唱える。
●４： Kyrie　(あわれみの賛歌)(通常文・会衆)　神とキリストと聖霊に、憐れみを乞う。
×　Gloria　(栄光の賛歌)　(通常文・会衆)　死者のためのミサでは省略。
５： Collecta (集会祈願)　(固有文・司祭)　その日のミサの目的を祈る。

【ことばの典礼】聖書の朗読と説教

６： Lectio libri apostoli(書簡の朗読)(固有文・朗読者)
新約聖書後半の、イエスの弟子が各地の教会に宛てた手紙を朗読。
●７： Graduale (昇階唱)　(固有文・会衆)　旧約の内容を思い起こす。詩は旧約の詩編からとられる。
●８： Tractus　(詠唱)　(固有文・会衆)　福音書朗読を歓迎する歌。通常のミサではハレルヤ唱が用いられる。
●９： Sequentia(続唱)　(固有文・会衆)　Tractusに続く歌。通常のミサでは省かれる。
10： Salutatio(挨拶)　(通常文・対話)　挨拶を交わし、福音書への心構えを新たにする。
11： Lectio evangelii(福音書の朗読)(固有文・助祭)
新約聖書前半の、イエスの伝記を朗読。
12： Homilia　(説教)　(固有文・司祭)　朗読の内容にちなんで、教えを解説する。
×　Credo　(信仰宣言)　(通常文・会衆)　死者のためのミサでは省略。
13： Oratio communis(共同祈願)(固有文・一同)　信者たちのいろいろな祈りを捧げる。

【感謝の典礼】聖体の準備

●14： Offertorium(奉納唱)　(固有文・会衆)　パンとぶどう酒を聖壇に捧げる。
15： Secreta　(密唱)　(固有文・司祭)　奉納を祈願する祈りで、黙読される。
16： Salutatio　(叙唱前の挨拶)(通常文・対話)　挨拶を歌い交わす。
17： Praefatio　(叙唱)　(固有文・司祭)　神と会衆の前で、キリストの救いの業を述べ、記念する。
●18： Sanctus　(感謝の賛歌)　(通常文・会衆)　神の神聖さに感動する歌。
●19： Benedictus(感謝の賛歌(続き))(通常文・会衆)　パンとぶどう酒の形をとってやって来る主キリストを歓迎する歌。
20： Canon missae(ミサ典文＝聖別祈祷、奉納文)(通常文・司祭)
最後の晩餐でのキリストの言葉を元にした祈り。パンとぶどう酒を聖体に変える(聖変化)。感謝の賛歌の間に司祭が黙ったまま祈る。

【交わりの儀】聖体を拝領

21： Pater noster(主の祈り)　(通常文・会衆)　キリストが弟子に教えた、神への祈り。
22： Embolismus　(副文)　(通常文・司祭)　主の祈りの補足。
23： Pax　(平和の挨拶)　(通常文・対話)　平和を祈って前後左右の人と挨拶する。

●24： Agnus Dei　（平和の賛歌）（通常文・会衆）　聖体となったパンをキリストの象徴として「神の小羊」と呼び、憐れみを乞う。

●25： Communio　（聖体拝領唱）（固有文・会衆）　信者は並んで司祭の前に進み出て、パン(ホスチア)を受ける。その間演奏される。

26： Oratio　（拝領祈願）　（固有文・司祭）　最後の晩餐の秘蹟が日々の生活に活かされるよう祈る。

【閉祭】

27： Ite Missa Est(閉祭の挨拶)(通常文・司祭)　ミサで元気づけられた信者達を教会外の社会へ送り出す。

【ミサ終了後の儀式】

●28： Absolutio　（赦祷唱＝リベラ・メ）　参加者の赦免と、死者の平安を祈る。

●29： In Paradisum（天国にて）　出棺の時、故人が天国に行けるよう願う。

レクイエムの作曲の歴史

ミサの文句は昔から「歌うように唱える」のが正式とされており、中世にはグレゴリオ聖歌として、通常文、固有文のそれぞれに単旋律の曲がつけられていました。

ミサに必要な曲をひとまとまりの多声部の合唱曲として作曲する「通作ミサ」は、14世紀に今のベルギーを中心とするフランドル楽派で始まりました。レクイエムの作曲もそれに続き、現存するものでは15世紀末のオケヘムのものが最古です。

その後1569年のトレント公会議(宗教上の重要問題を討議する会議)で、ミサの式次第が統一されました。この際言葉に若干の変更があったらしく、これ以前と以後ではレクイエムの歌詞が一部異なっています。

18世紀まで、レクイエムは教会において、礼拝の中で演奏されるものでした。全曲まとめてではなく、聖書朗読や説教や聖体拝領などにはさまれて、ミサの儀式の中でばらばらに演奏されました。

18世紀後半、古典派の時代に入ると、２つの変化が起こります。まず教会では、レクイエムを含むミサ曲があまりにも大規模かつ高度になりすぎて、信者が一緒に歌って礼拝に参加することが出来なくなってしまったことに対する反省が起こり、やさしい聖歌を皆で歌うような礼拝に変わってゆきました。そのため大規模なミサ曲やレクイエムが教会で演奏されることは減ってゆきました。一方ちまたでは王侯貴族に替わる市民社会の発展にあわせ、客を集めて音楽を聞かせる演奏会という音楽発表の形態が発達し、多くのコンサートホールが作られました。

これらの理由から、レクイエムの演奏の場は教会からコンサートホールに移りました。そこではレクイエムは、教会でのようにばらばらにではなく、全曲を通してまとめて演奏されるようになりました。

礼拝に用いるという制約を逃れたレクイエムでは、礼拝用に定められた歌詞に従う必要もなくなったので、一部の作曲家は独自の歌詞で曲を作っています。自分で聖書から言葉を選んで作曲したブラームスや、有名な詩人の詩に曲をつけたヒンデミットなどがその例です。これらの曲は、死者を悼むという曲の目的から「レクイエム」と呼ばれてはいますが、歌詞が異なるという点で本来のレクイエムとは区別されるべき作品たちです。

昔のレクイエムは、教会専属の作曲家が礼拝のために必要に応じて作曲しました。作曲家が教会から独立し始めた古典派時代には、貴族の葬式などの際に依頼を受けて作曲されることも多くなりました。ロマン派以後は、親族や友人、著名人の死に感銘を受けて作曲したり、戦争反対のようなメッセージを込めて作曲するなど、依頼によらず自分の意志で作曲される例が多くなっています。

最後に私の家にあったレコードの歌詞カードから、作曲者ごとにミサのどの部分が作曲されているかを年代順にまとめ、下の表に示します。グラドゥアーレ、トラクトゥスが、初期にはよく作曲されたのに古典派以後はあまり作曲されなくなったこと。それにかわって長大なセクエンツィア(ディエス・イレ)がよく作曲されるようになったこ

とが分かります。

作曲者	(作曲年)	イントロイトゥス	キリエ	グラドゥアーレ	トラクトゥス	セクエンツィア	オッフェルトリウム	サンクトゥス	ベネディクトゥス	ピエイエズ	アニュスデイ	コンムニオ	リベラ・メ	天国にて	活動した国
オケヘム	(1483頃)	●	●	△	△		●								フランドル
ラ・リュー	(1510頃)	●	●		△		●	●	●		●	●			フランドル
ラッソ	(1580)	●	●	●	●		●	●	●		●	●			フランドル
ビクトリア	(1605)	●	●	●			●	●	●		●	●	●		スペイン
ｾﾚﾛｰﾙｽ	(1670頃)	●	●	●		●	●	●	●		●	●	●		スペイン
ｼｬﾙﾊﾟﾝﾃｨｴ	(1690頃)		●	△		●	●	●	●	●	●				フランス
チマローザ	(1787)	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●			イタリア
ﾓｰﾂｧﾙﾄ	(1791)	●	●			●	●	●	●		●		●		オーストリア
ケルビーニ	(1816)	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●			イタリア→フランス
ﾍﾞﾙﾘｵｰｽﾞ	(1837)	●	●			●	●	●			●	●			フランス
シューマン	(1852)	●	●			●	●	●	●		●				ドイツ
ﾄﾞﾎﾞﾙｻﾞｰｸ	(1890)	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●			チェコ
ベルディ	(1874)	●	●			●	●	●	●		●	●	●		イタリア
フォーレ	(1888)	●	●				●	●		●	●	●	●	●	フランス
ﾃﾞｭﾘｭﾌﾚ	(1947)	●	●				●	●	●	●	●	●	●	●	フランス
ブリテン	(1962)	●	●			●	●	●	●		●		●		イギリス
ウェッバー	(1985)	●	●			●	●	●	●	●	●	●	●		イギリス

凡例

● 作曲されている　△ 他の歌詞を利用して作曲されている

※ 独自の歌詞によるもの

ブラームス(1867 独)、ディーリアス(1916 仏)、ヒンデミット(1945 独→米)など

※ ブリテンはミサの言葉の他に、独自の歌詞も含む。

おわりに　モーツァルトのレクイエムを見ていると、彼の歌詞に対する深い理解に驚かされます。ディエス・イレの tremor(震え)でバスが震えたり、ドミネ・イエズの profundo lacu(底知れぬ洞穴)で音程が沈んで行くなど音画的手法をきっちり行ないながら、なおかつ歌詞のイントネーションと曲の旋律がきれいに対応しているのは感心します。これに比べ、弟子のジュスマイヤーが作曲したホスティアス以降はそれなりにきれいな曲ですが、アクセントのない音節で旋律が最高音に達する箇所がたくさんあるなど、歌詞と旋律の対応が急に崩れます。モーツァルトが死ぬ前に彼に旋律を指示しておいたという説がありますが、もしそうならこうは崩れなかったことでしょう。

もうひとつ。フランス人フォーレの曲では、本来アクセントのないはずの語尾の音節に重みがくる旋律がよく出てきます。そのイントネーションで歌詞を朗読してみると、、、、、、ほら、鼻にかかった声で語尾を延ばす「フランス語の香り」のするレクイエムになっているでしょ。あの曲はフランス訛りだったのですね。

第8章　マタイ受難曲

名訳に事欠かないマタイ受難曲ですが、多くの訳は美しさや荘重さを重視するあまりか、分かりやすさや原文との正確な対比が、ともすればないがしろになってしまっています。そこで今回は、なるべく平易かつ逐語訳的に訳してみました。　　（訳　伊藤　啓）

［註］

・合唱、ソロは４声部×２グループからなり、各グループで受け持つ性格が若干異なります。訳中パートの後に示されたローマ数字 I, II は、この分担を示しています。

・曲番号はベーレンライター原典版に準拠しているので、旧バッハ全集に準拠したＣＤや楽譜（ペーター版など）とは番号が異なります。

［歌詞の構成］

・聖句　　マルチン・ルターによるドイツ語版新訳聖書（1522訳）マタイ福音書第26～27章より抜粋

・自由詩（レシタティーボとアリア）クリスチャン・フリードリヒ・ヘンリーツィ（筆名ピカンダー）作
　　「まじめな冗談と好色な詩　第 II 部」に掲載　　（1729刊　P.101～112）

・コラール　ルター派教会の賛美歌（バッハ編曲）　訳中にもとの作者、制作年、使われた節を掲示

※マタイ受難曲の初演は、1727年の受難週（4/15）と推定されている。

第 I 部

第１曲

二重合唱

来たれ、娘たち、共に嘆こう。
見よ。－誰を？
　　－その花婿を。
見よ。－どのような？
　　－子羊のようなのを。
見よ。－何を？
　　－その忍耐を。
見よ。－どこを？どこを？
　　－私たちの罪を。
愛と慈しみのために十字架の木を
みずから担ぐ彼を見よ。

コラール　　（N.デーツィウス作 1522 1～2節）

おお神の子羊、
罪なくして十字架の上にて殺され、
どんなに辱めを受けても
どんなときにも堪えている。
あなたは全ての罪を負っているが、
そうでなければ私たちは絶望してしまう。
おおイエスよ、我らを憐れんで下さい。

第２曲

福音史家　イエスはこれらの言葉をみな言いおえてから、弟子たちに言われた。

イエス　　皆の知っているとおり、２日後は過越の祭りである。そこで人の子は、十字架につけられるために引き渡されるだろう。

第３曲　コラール　（J.ヘールマン作 1630 1節）

心より愛するイエスよ、こんなに厳しい判決を受けるようなどんな罪を、あなたは犯したというのですか？
その罪とは何ですか？どんな悪業に陥ったというのですか？

第４曲

福音史家　そのとき、大祭司や律法学者、民の長老らがカヤパという大祭司の邸宅に集まり、策略をもってイエスを捕らえて殺そうと話し合った。しかし彼らは言った。

二重合唱　そうだ、祭りの間はいけない。
民衆の間に暴動が起こらないように。

福音史家　さて、イエスがベタニアのらい病人シモンの家にいたとき、ある女性が高価な香油の入った石膏の壺を持って彼に近づき、食卓についていたイエスの頭に振りかけた。
弟子たちはそれを見て、憤って言った。
合唱 I　何のためにこんな無駄をするんだ？
この香油を高く売って、貧しい人に施しをすることが出来たじゃないか。
福音史家　イエスはこれに気づいて、弟子たちに言った。
イエス　なぜこの女性を困らせるのだ？私に良いことをしてくれたのだ。諸君はいつも貧しい人と一緒にいるが、私とはいつも一緒にいるわけではない。
彼女が私の体に香油を注いだのは、私の埋葬の準備をしてくれたのだ。
確かに諸君に言っておこう。全世界どこででも、この福音の宣べ伝えられるところでは、彼女のしたことも記念として語られるだろう。

第５曲　レシタティーボ（アルト I）
愛する救い主の君よ、
この心やさしい女性が香油をもってあなたの体に葬りの用意をしたのを、弟子たちが愚かにもとがめるならば、
そのときには私の目にあふれる涙をあなたの頭に注ぐのをお許し下さい。

第６曲　アリア（アルト I）
懺悔と後悔は罪の心を二つに引き裂く。
私の涙のしずくは、まことなるイエスの、
かぐわしい香料になるでしょう。

第７曲
福音史家　そのころ、12人の弟子の１人のイスカリオテのユダという者が、大祭司らの所に行って言った。
ユダ　私にいくらくれますか？彼をあなたがたに売りましょう。
福音史家　そこで大祭司らは銀貨30枚を差し出した。そのときからユダはイエスを引き渡そうと機会を狙っていた。

第８曲　アリア（ソプラノ II）
ただ血にまみれよ、愛する主のみ心よ。
ああ、あなたの育てた子、あなたの胸で乳を吸った子は、その親を脅かし殺さんとする。
その子は蛇になってしまったのだ。

第９曲
福音史家　さて、酵母無しパンの祭り（過越の祭り）の１日目に、弟子たちはイエスのところに来て言った。
合唱 I　先生、過越の羊を食べるための用意を、どこにしたらいいでしょう？
福音史家　イエスは言った。
イエス　市内の例の人の所に行って、こう言いなさい。
「先生が、私の時が来た、あなたの所で弟子たちと過越を守りたい、とおっしゃっています。」
福音史家　弟子たちはイエスの命じた通りにして、過越の羊の用意をした。

夜になって、弟子たちと机を囲んで食事をしていたとき、イエスが言った。
イエス　たしかに諸君に言っておく。諸君の中の一人が、私を裏切ろうとしている。
福音史家　弟子たちは非常に心配して、次々に言い出した。
合唱 I　先生、私ですか？

第10曲　コラール　（P.ゲルハルト作 1647 5節）
それは私です。私こそ悔い改めなければなりません。
手と足を地獄につながれて。
鞭と縄、そしてあなたの堪えたもの、
それは私の魂こそが受けるべきものです。

第11曲

福音史家　イエスは答えて言った。

イエス　私と一緒に鉢に手を入れている人が、私を裏切ろうとしている。たしかに人の子は、書いてあるとおりに去って行く。しかし人の子が裏切られるその人はかわいそうだ。その人は生まれない方が、彼のためには良かっただろうに。

福音史家　イエスを裏切ったユダが答えて言った。

ユダ　師匠、私ですか？

福音史家　イエスは言った。

イエス　君の言うとおりだ。

福音史家　彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、感謝して裂いて、弟子たちに与えて言った。

イエス　取って食べたまえ。これは私の体だ。

福音史家　また杯を取り、感謝して弟子たちに与えて言った。

イエス　この杯から飲みたまえ。これは私の新しい契約の血だ。多くの人の罪の許しのために流す血なのだ。
諸君に言っておく。私の父の国で諸君と共に新しいものを飲むまで、私は今後決して葡萄の実から作ったものを飲まない。

第12曲　レシタティーボ（ソプラノ I）

イエスが私たちに別れを告げたことで私の心が涙に漂おうとも、それでもイエスの契約は私を喜ばせる。
そのかけがえのない肉体と血を、イエスは私の手に残してくださった。
イエスがこの世で彼らに悪くしなかったのと同様、世の終わりまで愛していてくださる。

第13曲　アリア（ソプラノ）

あなたに私の心を捧げます。
私の救いを私に授けて下さい。
私はあなたの内に沈みたいのです。
この世があなたにとって小さすぎるとも、
ああ、それなら私にとってあなただけが
天よりも地よりも大きなものなのです。

第14曲

福音史家　彼らは賛美歌を歌ったあとオリーブ山へ出かけた。そこでイエスは弟子たちに言った。

イエス　今夜、諸君はみな私につまづくだろう。聖書に「私は羊飼いを打つ。すると羊の群れは散りじりになる。」と書いてあるからだ。しかし私がよみがえったとき、私は諸君より先にガリラヤに行っていよう。

第15曲　コラール　（P.ゲルハルト作 1656 5節）

私の守り手よ、私を認めて下さい。
私の牧者よ、私を受け入れて下さい。
全ての善いものの源であるあなたから、
私はいろいろ善いことをしていただきました。
あなたのみ言葉はミルクと甘い食事をもって私を元気づけ、
あなたの霊は沢山の天国の喜びを私に授けて下さいました。

第16曲

福音史家　しかしペトロは答えてイエスに言った。

ペトロ　みんなが先生につまづいた時でも、私は決してつまづきません。

福音史家　イエスは言った。

イエス　はっきり君に言っておこう。今夜鶏が鳴く前に、君は三度私を知らないと言うだろう。

福音史家　ペトロが言った。

ペトロ　たとえ先生と一緒に死ななくてはならなくなった時でも、決して先生を知らないなどとは言いません。

福音史家　弟子たちはみな同じように言った。

第17曲　コラール　（P.ゲルハルト作 1656 6節）

私はあなたのそばにいます。私を侮らないで下

さい。
たとえあなたの心臓が裂けても、あなたのもとから離れません。
最期のとどめのひと突きに、あなたの心臓が蒼ざめるとき、そのとき私は、腕とひざであなたを抱きましょう。

第18曲

福音史家　それからイエスは彼らと共にゲッセマネという園に来た。彼はそこで弟子たちに言った。
イエス　私が向こうに行って祈っている間、ここに座っていなさい。
福音史家　そしてペトロと、ゼベダイの２人の子らを連れて行ったが、イエスは悲しみ、悩み始めた。そこで彼らに言った。
イエス　私の心は滅入って死にそうなほどだ。ここにいて、私と一緒に目を覚ましていなさい。

第19曲　レシタティーボ（テノールⅠ）とコラール（合唱Ⅱ　J.ヘールマン作 1630 3節）

テノール　おお悩みよ、悩める心はここにうち震える。

心は沈み、顔は蒼ざめる。
合唱Ⅱ　このような苦難の原因は何なのですか？
テノール　裁き人は主を法廷に連れて行く。

そこには慰めも救いもない。
合唱Ⅱ　ああ。私の罪があなたを打ったのだ。
テノール　主は地獄の苦しみに傷つく。

他人の罪をあがなわねばならなかったのだ。
合唱Ⅱ　ああ主イエスよ、あなたの堪え忍んだものは、私の引き起こしたものなのです。
テノール　ああ、私の愛と救いがあなたの震えとおののきを和らげ、担うのを手伝うことが出来るものなら、私は喜んでここにとどまりましょう。

第20曲　アリア（テノールⅠと合唱Ⅱ）

テノール　私はイエスのもとで目覚めていよう。
合唱Ⅱ　そうすれば私たちの罪は眠りにつく。
テノール　主の霊の苦しみが私たちの死をあがない、主の涙は私の最高の喜びとなる。
合唱Ⅱ　だから、主の尊い苦しみは、私たちには確かに苦いけれども、それでも甘いものなのである。

第21曲

福音史家　そして少し進んでいき、うつ伏せになって、祈って言った。
イエス　我が父よ、もし出来ることなら、この杯を私から遠ざけて下さい。しかし私の思うようにではなく、あなたの思うようになさって下さい。

第22曲　レシタティーボ（バスⅡ）

救い主は父のみ前にひれ伏している。こうして主は私と全ての人を、我々の堕落から神の恵みへと再び引き上げて下さる。
主は、この世の罪がそそぎ込まれ、悪臭を放つ死の苦しみの杯を飲む覚悟を決めた。愛する神がそれを望んだのだから。

第23曲　アリア（バスⅡ）

喜んで私は、十字架と杯を我慢して取り、
救い主にならって飲み干そう。
なぜなら、乳と蜜にあふれる主のみ言葉は、苦い恥辱の根底と悲しみを、最初の一口で甘くさせるのだから。

第24曲

福音史家　そして主は弟子たちの所にきて、彼らが眠っているのを見つけて言った。
イエス　ひとときすらも私と一緒に目を覚ましていられないのか？誘惑に陥らないように目を覚まして祈っていなさい。魂は熱心だが、肉体が弱いのだ。

福音史家　また２回目に行って、祈って言った。
イエス　我が父よ、もしこの杯を私から遠ざけることが出来ないのでしたら、私はそれを飲みます。それであなたのご意志が成就しますように。

第25曲　コラール　（アルブレヒト作 1554 1節）
私の神の望むものは、つねに成就される。
その意志こそ、最高のもの。
神を堅く信仰する者に、神は助けを惜しまない。
正しき神は、人を苦悩より救い、情けをもって懲らしめる。
神を信じ、神の上に堅く礎を築くものを、
神は見捨てようとはしない。

第26曲
福音史家　主が来ると、弟子たちが寝ているのを見つけた。彼らの目はすっかり眠っていた。それで彼らをそのままにして、また行って、３度目に祈って同じ言葉を語った。そして弟子たちの所に帰ってきて、彼らに言った。
イエス　ああ。諸君はまだ眠りたいのか？休みたいのか？
見よ、時が来た。人の子は罪人らの手に渡されるのだ。立て、行こう。見よ、私を裏切るものがあそこにいる。
福音史家　そしてイエスが話しているときに、見よ、十二弟子の１人ユダが来た。彼と共に、大祭司、民の長老たちから遣わされた大勢の群衆が剣と棒とを持ってやって来た。
裏切り者は予め合図を決めて言った。
「私のキスする人がその人だ。そしたら捕まえろ。」
そしてすぐにイエスに近寄って言った。
ユダ　師匠、ご機嫌いかがですか？
福音史家　そしてイエスにキスをした。しかしイエスは彼に言った。
イエス　友よ、なぜ君は来たのだ？
福音史家　このとき、人々が進み寄ってイエスに手を掛け、捕まえた。

第27曲　アリア（ソプラノ I、アルト I、合唱 II）
二重唱　こうしてイエスは今や捕らわれた。
合唱 II　彼を放せ！待て！縛るな！
二重唱　月も光も悲しみに姿を消した。私のイエスが捕らえられたから。
合唱 II　彼を放せ！待て！縛るな！
二重唱　彼らは縛られたイエスを連行する。

二重合唱　稲妻も雷鳴も雲の中に消え去ったのか？

火の淵を開け、おお地獄よ。
打ち砕け、　滅ぼせ、
飲み込め、　粉々にしろ！
激しい怒りを込めて、
あの不実の裏切り者を、人殺しの血を！

第28曲
福音史家　すると見よ、イエスと一緒にいた弟子たちの１人が、手を伸ばして、大祭司の従僕に切りつけて片耳を切り落とした。そこでイエスは彼に言った。
イエス　剣を元の所に収めなさい。剣を取るものは剣によって滅びるからだ。それとも君は、12軍団以上の天使を私のもとに遣わすよう私が父に頼めないとでも思うのか？
しかしそれではどうして聖書の言葉が成就されよう？その通りにならねばいけないのだ。
福音史家　そのとき、イエスは群衆に言った。
イエス　あなたがたは人殺しに向かうように剣や棒を持って私を捕らえにやって来たのか？私は毎日あなたがたのそばに座り、神殿で教えを語っていたのに、あなたがたは私を捕まえはしなかった。
しかし起こったこと全ては、予言者たちの書いたことが成就するためである。
福音史家　そのとき、弟子たちはみなイエスを見捨てて逃げ去った。

第29曲　コラール・ファンタジー（合唱 I, II）
（S.ハイデン作 1525 1節）

おお人よ、汝の罪の大きさに泣け。
それゆえにキリストは、父の膝より出て地上に来たのだ。
清くやさしい乙女より、主は私たちのために生まれた。とりなしの主となるために。
主は死者に生命を与え、そのうえ全ての病を取り去った。
まことに十字架の上で私たちのためにいけにえとなり、私たちの罪の重荷を担う時の来るまで。

第 II 部

第30曲　アリア（アルト I）と合唱 II

アルト　ああ、今や私のイエスは行ってしまわれた。
合唱 II　女たちのうちで最も美しいあなた、

あなたの友人はどこへ行ってしまったのですか？
アルト　私は見つけることが出来るでしょうか？
合唱 II　あなたの友人はどこへ向かったのですか？
アルト　ああ！虎の爪に捕らえられた私の子羊、

ああ！私のイエスはどこへ行ってしまわれたのだろう？
合唱 II　それでは私たちも、あなたと一緒に彼を探しましょう。
アルト　ああ！魂が不安にかられて私に尋ねるならば、私は何と言うべきだろうか？

私のイエスはどこへ行ってしまわれたのだろう？

第31曲

福音史家　しかし、人々はイエスを捕らえ、大祭司カヤパのところへ彼を引いて行った。そこには律法学者や民の長老たちが集まっていた。

ペテロはことの成り行きを見届けるために、大祭司の館までイエスに遠くからついて行き、中に入って従僕たちの間に座った。

大祭司たち、長老たち、全議会は、イエスを死刑にするため彼に対する偽りの証拠を探したが、何も見つからなかった。

第32曲　コラール　（A.ロイスナー作 1533 5節）

世の中は、偽りと作りごと、多くの網と秘密の罠をもって私をあざむいた。
主よ、このような危険の中で私を顧み、
偽りの企みより私を守って下さい。

第33曲

福音史家　そこで多くの偽証者が出てきたのだが、何も証拠を見つけられなかった。最後に 2 人の偽証者が出てきて言った。
証人 2 人　彼は「私は神殿を打ち壊し、3 日で建て直すことが出来る。」と言いました。
福音史家　すると、大祭司が立ち上がってイエスに言った。
大祭司　彼らが汝に不利な証言をしているが、それに何も答えないのか？
福音史家　しかしイエスはじっと黙っていた。

第34曲　レシタティーボ（テノール II）

私のイエスは偽りの嘘にじっと黙っておられた。
私たちに次のことを示すために。
憐れみに満ちたみ心が、私たちのために苦悩を受けたことと、
同じような傷みの中で私たちもイエスと同じように、迫害の中でもじっと黙っているべきこと

とを。

第35曲　アリア（テノールII）

堪えよ、堪えよ、偽りの弁舌が私を刺すならば。
私の罪や侮辱、あざけりに対して私が苦しむなら、
ああ、私の愛する神が、私の心の無実に報いて下さる。

第36曲

福音史家　そこで大祭司は答えて言った。
大祭司　生ける神の御名によりて汝に命ずる。汝が神の子キリストなのかどうか、我らに答えよ。
福音史家　イエスは言った。
イエス　あなたの言うとおりだ。しかし、私はあなたがたに言っておく。今よりのち、あなたがたは人の子が力あるものの右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう。
福音史家　大祭司はその着物を引き裂いて言った。
大祭司　こいつは神を冒涜した。もうこれ以上の証言の必要があろうか？見よ、諸君は今、こいつの神への冒涜の言葉を聞いた。どう思うか？
福音史家　彼らは答えて言った。
二重合唱　やつは死罪だ！
福音史家　そこで、彼らはイエスの顔に唾をかけ、こぶしで打った。また何人かは顔をひっぱたいて言った。
二重合唱　あてて見ろ。あてて見ろ。キリストさんよ、おまえをぶったのは誰だい？

第37曲　コラール　（P.ゲルハルト作 1647 3節）

私の救い主よ、誰があなたをこんなにも打ち、苦痛を与えてこのように不当に裁いたのですか？
あなたは、私たちやその子孫のような罪人では全くありません。あなたは悪事をご存じないのです。

第38曲

福音史家　さて、ペテロは邸の中で屋外に座っていた。するとひとりの女中が来て言った。
女中1　おや、あなたもガリラヤ人のイエスと一緒にいましたね。
福音史家　彼は皆の前で打ち消して言った。
ペテロ　何を言っているか、わからないです。
福音史家　門まで出て行ったとき、他の女中が彼を見て、そこにいた人々に言った。
女中2　この人もナザレ人のイエスと一緒にいたよ。
福音史家　そこで、彼はまた打ち消して、誓って言った。
ペテロ　そんな人、知らないです。
福音史家　しばらくして、そこに立っていた人がペテロに近づいて来て言った。
合唱II　確かにおまえもあいつらの一人だ。訛りでわかる。
福音史家　彼は呪い、誓いだした。
ペテロ　そんな人、知らないです。
福音史家　そしてそのとき鶏が鳴いた。ペテロは「鶏が鳴く前に君は三度私を知らないと言うだろう。」というイエスの言葉を思い出し、外へ出て激しく泣いた。

第39曲　アリア（アルトI）

憐れんで下さい、神よ、私の涙のゆえに。
見て下さい、心も目もあなたの前で激しく泣いているのを。
憐れんで下さい、憐れんで下さい。

第40曲　コラール　（J.リスト作 1642 5節）

私は、たとえあなたからすぐに離れて行っても、それでも再び、み前に現れます。
あなたのみ子は、不安と死の苦しみを通じて私たちを許して下さいました。
私は罪を否認しません。しかしあなたの恵みと恩寵は、私の内にいつも見いだせる罪よりずっと大きいのです。

第41曲

福音史家　朝がくると、大祭司や民の長老たち一同はイエスを殺そうと協議した。そしてイエスを縛り、引き出して総督ポンツィオ・ピラトに渡した。

イエスを裏切ったユダは、イエスが死刑の宣告をされたのを見て後悔し、銀貨30枚を大祭司や民の長老に返して言った。

ユダ　私は悪いことをしました、罪の無い人の血を売るなんて。

福音史家　彼らは言った。

二重合唱　我々になんの関係があるのか？　自分の勝手にしたまえ。

福音史家　そこで彼は銀貨を神殿に投げ込み、出て行って、自ら首をくくった。

大祭司らは銀貨を拾って言った。

大祭司２人　これは血の代価だから、神の金庫に入れるのは良くない。

第42曲　アリア（バスII）

私のイエスを返せ。
見よ、人殺しの報酬の金を
放蕩息子は足元に投げ出したのだ。
私のイエスを返せ。

第43曲

福音史家　彼らは協議して、その金で旅行者の墓を作るために陶器師の畑を買った。そのためにこの畑は今日まで血の畑と呼ばれている。こうして予言者エレミヤによって言われたことが成就したのである。すなわち
「主が私にお告げになったように、彼らは、イスラエルの子らから買った売り物（＝イエス）の代金である30枚の銀貨を取り、陶器師の畑の代価として与えた。」

さて、イエスは総督の前に立ち、総督は彼に尋ねて言った。

ピラト　汝はユダヤの王なのか？

福音史家　イエスはそこで言った。

イエス　あなたの言うとおりです。

福音史家　そして大祭司や長老たちからの告発があったが、彼は何も答えなかった。ピラトはイエスに言った。

ピラト　彼らがあのように激しく汝を告発しているのが、聞こえないのか？

福音史家　しかし、総督が不思議に思うほどに、イエスは一言も答えなかった。

第44曲　コラール　（P.ゲルハルト作 1653 1節）

あなたの道と、あなたの心を患わすものとを、
天をつかさどる最も信ずべき守りにゆだねよ。
主は、雲や空気や風に道と進路と方向を与え、
あなたの足の進むことの出来る道を、見いだして下さるだろう。

第45曲

福音史家　さて、祭りのさいに総督は民衆の望む囚人１人を許してやる慣例になっていた。時にバラバという有名な囚人がいた。そこで人々の集まったとき、ピラトは彼らに言った。

ピラト　汝らは私が誰を許すのを望むのか？バラバか？それともキリストと呼ばれるイエスか？

福音史家　というのは、彼らは妬みからイエスを引き渡したのだと、ピラトはよく知っていたからである。また、彼が裁判の席についていたとき、彼の妻が人を遣わせて言わせた。

ピラトの妻　その正しい人に関係しないで下さい。私はきょう夢の中で、この人のことでさんざん苦しみました。

福音史家　しかし、大祭司や長老たちは、バラバの許しを願い、イエスを殺してもらうよう民衆を説き伏せた。
さて、総督は彼らに答えて言った。

ピラト　２人のうち、どちらを許してもらいたいのか？
福音史家　彼らは言った。
合唱 I, II　バラバを！
福音史家　ピラトは言った。
ピラト　それではキリストと呼ばれるイエスはどうしたら良いのか？
福音史家　彼らはいっせいに言った。
合唱 I, II　やつを十字架につけろ！

第46曲　コラール　（J.ヘールマン作 1630 4節）
まったくこの罰の何と驚くべきことだろう。
善良な羊飼いが羊たちのために苦しみ、
正義の人である主が、そのしもべのために負債を支払うというのだ。

第47曲
福音史家　総督は言った。
ピラト　彼は一体どんな悪いことをしたのか？

第48曲　レシタティーボ（ソプラノ I）
主は私たちすべてに、良いことばかりされた。
盲人に見る力を与え、不具者を歩かせ、
私たちに父のみ言葉を語り、悪魔を追い払い、
悲しむ者を励まし、罪人を迎え入れ、受け入れた。
その他には、私のイエスは何もなさらなかった。

第49曲　アリア（ソプラノ I）
愛ゆえに私の救い主は死にたもう。
主はたった１つの罪さえ知らない。
かくて、永遠の滅亡も裁きの罰も、
私の心にはとどまらない。

第50曲
福音史家　すると彼らは、いっそう激しく叫んで言った。
合唱 I, II　やつを十字架につけろ！
福音史家　ピラトは手のつけようがなく、かえって大暴動になりそうなのを見て、水を取り、群衆の前で手を洗って言った。
ピラト　私は、この正しい人の血について責任を持たない。汝らの勝手にするがよい。
福音史家　すると、全群衆が答えて言った。
合唱 I, II　その血の責任は、俺たちと俺たちの子孫が取ってやる。
福音史家　そこで、彼はバラバを釈放し、イエスを鞭打たせ、十字架につけるために彼らに引き渡した。

第51曲　レシタティーボ（アルト II）
神よ、憐れんで下さい。
ここに救い主は縛られて立っている。
ああ鞭打ち、殴打、傷！
執行人よ、やめて下さい！
心の傷みが、このような痛ましい光景が、
あなたたちを和らげないのか？
ああそうだ、あなたたちも心は持っているが、
それはちょうど拷問の柱のように、いやそれよりもっとずっと、冷酷なのに違いない。
彼を憐れんで、やめて下さい！

第52曲　アリア（アルト II）
たとえ私の頬に涙が流れなくとも、
おお、私の心を受け取って下さい。
しかし主の傷が慈しみ深くも血を流すとき、
私の心をこの血で満たし、捧げ物の皿とならせて下さい。

第53曲
福音史家　それから総督の兵士たちはイエスを官邸に連れて行き、全部隊を彼のまわりに集めた。そして服を脱がせて紫のマントを羽織らせ、いばらの冠を編んで作って頭にかぶせ、右手には葦の棒を持たせて、その前にひざまづき、彼をあざけって言った。
二重合唱　ユダヤの王さま、ごきげんよう！
福音史家　また彼に唾を吐きかけ、葦の棒を取って、それで頭を叩いた。

第54曲　コラール（P.ゲルハルト作 1656 1～2節）

おお、血と傷にまみれ、苦しみと辱めに満ちたみ頭よ。
おお、あざけっていばらの冠で縛られたみ頭よ。
おお、かつては最高の栄誉と誇りで美しく飾られ、しかも今は「ごきげんよう」などとひどい屈辱を受けるみ頭よ。

かつては偉大な最後の審判さえも驚き、恐れた、あなたの気高いみ顔、
なんと唾を吐きかけられ、なんと蒼ざめていることか。
かつては他に比肩しうる光のなかったあなたの眼光を、
誰がこうも恥辱にまみれさせたのか？

第55曲

福音史家　そしてこのようにイエスを嘲弄したあと、マントを剥いで元の服を着せ、十字架につけようと引いて行った。彼らの出てきたとき、クレネ出身のシモンという男を見つけたので、イエスの十字架を無理やり背負わせた。

第56曲　レシタティーボ（バスⅠ）

そうだ、もちろん我々の中でも、肉体と血に十字架を背負わせよう。
我々の心が善になればなるほど、つらさも増すのだ。

第57曲　アリア（バスⅠ）

来たれ、甘き十字架よ。私はあえてそう言おう、我がイエスよ、さあ十字架を我に与えたまえ。
私の苦難の重すぎるとき、私がそれを負うのを助けたまえ。

第58曲

福音史家　そしてゴルゴタ、すなわちドイツ語でSchaedelstaett（＝しゃれこうべの場）という所につくと、彼らは苦みを混ぜた酢っぱくなった葡萄酒をイエスに飲ませようとした。イエスはこれをなめたが、飲もうとはしなかった。

兵士たちはイエスを十字架につけてから、くじを引いて彼の服を分けあった。これは予言者によって「彼らは私の服を仲間うちで分けあい、私のローブをくじ引きにした。」と言われたことが成就するためである。

そして彼らはそこらに座って、イエスの見張りをした。イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王、イエスである」と、死刑宣告の理由書が掲げられていた。
イエスとともに、２人の殺人犯が１人はイエスの右側、もう１人は左側に十字架につけられた。
そこを通りかかった者たちは、イエスをののしり、頭を振りながら言った。

二重合唱　神殿を壊して３日で建てるというお前さんよ、自分を助けてみろ。
もし神の子だと言うんなら、十字架から降りて見せろよ。

福音史家　同じように大祭司たちも、律法学者や長老らといっしょにあざけって言った。

二重合唱　こいつは他人は救っても、自分は救えないわけだ。
イスラエルの王ならば、いますぐ十字架より降りて来たまえ。そうすれば信じてあげよう。
こいつは神を頼りにしている。神はこいつを救い出したいはずだ。なにしろ「私は神の子だ」と言っていたのだから。

福音史家　一緒に十字架につけられていた殺人犯どもまでも、同じようにイエスをののしった。

第59曲　レシタティーボ（アルトⅠ）

ああゴルゴタよ、呪うべきゴルゴタよ、
栄光の主は恥辱にまみれてこの地で滅びなくて

はならない。
この世の祝福と救いは、十字架についた呪いのようになってしまった。
天と地の創造者も、大地と空気を奪い取られ、無実の者もここでは罪を負って死ななくてはならない。
これは私の心をつき動かす。
ああゴルゴタよ、呪うべきゴルゴタよ、

第60曲　アリア（アルトIと合唱II）

アルト　見よ、イエスは我らを受け止めようと手を広げていらっしゃる。
来たれ。
合唱II　どこへ？
アルト　イエスの腕の中へ。
救いを求め、憐れみを受けよ、
求めよ。
合唱II　どこに？
アルト　イエスの腕の中に。
ここで生き、ここで死に、ここで憩え、
汝ら見捨てられたひよこたちよ、
とどまれ。
合唱II　どこに？
アルト　イエスの腕の中に。

第61曲

福音史家　第6時（昼の12時）から地上が全部暗闇になって、第9時（午後3時）に及んだ。そして第9時に、イエスは大声で叫んで言われた。
イエス　エリ、エリ、ラマ　アサプタニ。
福音史家　これは、「我が神、我が神、なぜ私を見捨てたのですか？」という意味である。
そこに立っていた何人かが、これを聞いて言った。
合唱I　あれはエリヤを呼んでるんだ。
福音史家　そこで中の1人がすぐに走ってゆき、海綿を取って酸っぱい葡萄酒を含ませ、葦の棒につけてイエスに飲ませた。
一方、他の者たちは言った。
合唱II　待て、待て、エリヤが来て彼を助けるかどうか見てやろう。
福音史家　しかしイエスはもう一度大声で叫んで、息絶えた。

第62曲　コラール　（P.ゲルハルト作 1656 9節）

いつの日か私が世を離れ去らなくてはならないとき、私から離れ去らないで下さい。
私が死に苦しまなくてはならないとき、
そのとき私の所へ来て下さい。
私の心のまわりにとても不安なことがあるとき、
あなたの受けた不安と苦痛をもって、
私を不安から遠ざけて下さい。

第63曲

福音史家　そのとき見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。そして地は震え、岩は裂け、墓が開いて、眠っていた多くの聖者の死体が生き返った。そしてイエスの復活ののち、墓から出て聖都に来て、多くの人の前に現れた。
百卒長や、彼とともにイエスの見張りをしていた人々は、地震とこれらの出来事を見て、とても恐ろしくなって言った。
合唱I, II　ほんとうに、この人は神の子だったのだ。
福音史家　さて、そこにはイエスを遠くから見ていた沢山の女性がいた。ガリラヤからイエスに従って来て、イエスにつくしていた人たちである。その中にはマグダラのマリア、ヤコブとヨゼフの母マリア、ゼベダイの子らの母などがいた。
夕方になって、イエスの弟子であるアリマタヤ出身のヨセフという金持ちが来た。彼はピラトのところに行って、イエスの遺体の下げ渡しを願い出た。
そこでピラトは、遺体を彼に渡すよう命じた。

第64曲　レシタティーボ（バスI）

涼しいこの夕べに、アダムの堕落は明らかになった。
この夕べに、救い主は自らひれ伏した。
この夕べに、鳩は帰ってきて、口にオリーブの葉をくわえてきた。
おお美しい時間！おお夕べの時！
イエスが十字架を全うしたおかげで、平和の契りが、いまや神と結ばれた。
その遺体は安息に入る。
ああ、愛する心よ、おまえに頼もう、
行くのだ、死せるイエスをまかせよう。
おお、救いをもたらす尊い追憶よ。

第65曲　アリア（バスⅠ）
我が心よ、清らかになれ、私はみずからイエスを葬ろう。
主はいまこそ私の中で、永遠に、永遠に、甘き安息を得ているはずなのだから。
世界よ、出て行け、イエスを招き入れよ。

第66曲

福音史家　ヨセフは遺体を受け取って、きれいな亜麻布で巻いた。そして岩に彫らせてあった自分自身の新しい墓に横たえ、墓のとびら用に大きな石を転がしておいて、立ち去った。
しかしそこにはマグダラのマリアと他のマリアが残り、墓の前に座っていた。

あくる日、すなわち準備日の次の日、大祭司とパリサイ人らが全員でピラトの所にやって来て、言った。

二重合唱　閣下、思い出したのですが、あの嘘つきがまだ生きていたとき、「私は３日めに再びよみがえる」と言っていました。
ですから弟子たちが来て遺体を盗み、「イエスが死人の中からよみがえった」などと言うことのないよう、３日めまで墓を警備するよう命じて下さい。そんなことになると、今度の嘘は、前のよりもっと始末に負えないものになります。

福音史家　ピラトは彼らに言った。

ピラト　番兵を貸してやる。行って望むだけ警備したらよかろう。

福音史家　彼らは行って、番兵を置いて墓を警備し、石に封印をした。

第67曲　レシタティーボ（バスⅠ、テノールⅠ、アルトⅠ、ソプラノⅠ、合唱Ⅱ）

バス　今や主は憩いの床へ運ばれた。

合唱　私のイエスよ、お休みなさい。

テノール　我らの罪のために受けた苦しみも去った。

合唱　私のイエスよ、お休みなさい。

アルト　おお至福なるなきがら、
見て下さい、私の堕落のためにあなたがあんな苦しみに会ったことで、私がどんなに懺悔と後悔に泣いているかを。

合唱　私のイエスよ、お休みなさい。

ソプラノ　私の命の続く限り、あなたの受難に対し、私の魂の救いをかくも重んじて下さったという千の感謝を捧げます。

合唱　私のイエスよ、お休みなさい。

第68曲　二重合唱（終曲）
私たちは涙にくれてひざまづき、
墓の中のあなたに呼びかける。
　－憩え安らかに、安らかに憩え。
あなたの傷ついた手足を、憩わせて下さい。
　－憩え安らかに、憩えこころよく。
あなたの墓と墓石は、
悩める良心にとっての心地よい枕、
心の憩いの場所になるでしょう。
　－憩え安らかに、安らかに憩え。
このうえなく満ち足りて、そこで眼をまどろませて下さい。
私たちは涙にくれてひざまづき、
墓の中のあなたに呼びかける。
　－憩え安らかに、安らかに憩え。